Alternative Systems Study Bulletin

第11巻第1号

（2003年4月20日）

ニュースタート関西掲示板より

実践的地域通貨論

リエターの『未来のお金』

心理学ノート（その３）

ギブソンの『生態学的視覚論』（下）

後　記

編　集　境　毅

連絡先　〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ　http://homepage1.nifty.com/office-ebara/

メール　kyw04500@nifty.ne.jp

会　費　正会員　：　年間 1口　10万円

賛助会員　：　年間 1口　3万円

購読会員　：　年間 1口　1万円

振込先　口座名　：　資本論研究会

（郵便振替）口座番号　：　01090-5-67283

ニュースタート関西掲示板より ////////////////////////

（A）哲学は効くか

1）人は皆哲学者である

全ての人間は哲学者として生を受けている。ただこのことに気付く人は極く少数である。何かに悩んでいる人は、その時点で哲学をしているのだが、自分流儀でやっているため、哲学をしていることに気付かない。

自分が哲学者としても生きていることを発見しよう。ひよっとするとこれは副作用のないよく効く「薬」かもしれない。[2002/08/22 00:38:13]

2）ピアジェの哲学批判

いま発達心理学の大家ピアジェの『哲学の知恵と幻想』という本を読んでいます。これは私が今までお目にかかったことの無い変な本です。でも「哲学が効くか」というテーマの答えが書いてありそうです。今回は前振りだけにします。[2002/10/16 00:08:21]

ピアジェは科学的心理学をやっていて、哲学者が、科学的な理論を知らないままに心理学がどうあるべきかについて発言し、規範を提示していることに対して反論しているのですが、どうも科学自体が形而上学と一体になってしか存在できないことに無自覚なようです。科学自体がイデオロギーとしてしか存在しえない理由は、科学の個々の理論が歴史的な制約を受けているにもかかわらず、それが超歴史的な真理であるかのように自己主張している所にあります。人間にとって永遠なものを探求するのが形而上学だとピアジェは考えているのですが、科学は自らがえた理論を真理だと主張している訳ですから、この点では形而上学ですね。この事とは別に、ピアジェは哲学の効用をそれが知恵である所にもとめています。これは正しいと思います。今日の所はここまでにします。[2002/10/18 23:37:40]

3）ミードの自我論

2日の研修会でミードの社会心理学を取り上げました。面白かったのは、ミードが自我の形成について、それを社会的なものと見なし、他者の態度を取得すると言う事をメインにしている事でした。この掲示板でも人と付き合えないという意見が書き込まれていますが、ミードが生きていれば、この事態を他者の態度を取得できない事として解釈するでしょうね。もしコミュニケーションの不全が他者の態度を取得できないと言う事によるとすれば、解決の方法が見えてくるような気がします。[2002/11/04 00:05:13]

4）浜田寿美男は面白い

心理学の森をさ迷っていて、やっと自分の好みの心理学者を見つけました。浜田寿美男さんです。『発達心理学再考のための試論』（ミネルヴァ書房）は面白かったし『ピアジェとワロン』には啓発されました。その他にも沢山の著書があります。ニュースタートで講演会でも企画したいですね。

ところで浜田さんによればワロンはピアジェとは違って、人間を生まれた時から類的な存在として捉えていたとのことです。その根拠は情動による共感です。これは下手をすればナチスの大衆操作主義の道を開いてしまいますが、もっと別の、新しい文化の伝染という文脈で捉え返すことが出来そうです。文化を創ると言う事は正攻法では出来ません。というのも文化は生活の匂いのようなものでどの生活がどのような匂いを発散するかはやってみなければわからない、という所があります。生活を変えれば新しい文化が生み出される、これはほぼ確実に言えるでしょうが、この試みはニュースタートで既に始まっています。どんな匂いがしてますか。[2002/11/07 23:37:59]

浜田さんの本を読んでの感想ですが、引きこもりはピアジェの発達論への批判だ、という事です。どういう事かといえば、ピアジェの発達論は日本の教育論のバックボーンになっているようです。それは子供を個人と見て、彼がどのようにして科学的な論理を身につけていくかを後づけているのですね。ところがワロンによれば、子供は個人ではなくて、他者との共同関係の中で生きているのですね。この点での欠如が引きこもりの原因のように、私には思われます。ということは、世間がピアジェ的観点で教育してきた結果引きこもりが生まれていると言う事ではないでしょうか。[2002/11/08 23:00:18]

5）ワロンに注目

しばらく書きませんでしたが、この間ワロンを読んでいました。ワロンはピアジェと違って人が姿勢を取る動きに注目し、それが表現する表情が他人に伝わるという事実を非言語的コミュニケーションと考え、そしてこの動きが独自の神経中枢を持っていると言う事にもとづいて、姿勢が情動を作ると言う事を、人間の社会の結びつきを紡ぎ出すものと捉えたのでした。知識だけでは人間の社会を紡げないし、知識が社会の中でしか維持発展させられないと言う事を考慮すれば、情動による社会的結びつきの形成の方が知識の形成の根にあることになります。これは大変面白い考え方です。いずれワロンの説を紹介する場を作ります。［2002/12/14 00:28:57］

（B）哲学が効いた

1）哲学は一人一説

実は私はこの数年間、結構哲学書を読んできました。それは「新しい思考」について、他人に分かってもらえるように話しをするための学習でした。分かったことは、哲学は一人一説であり、読み継がれている哲学書は自分の興味にしたがって拾い読みをすればよい、自分の哲学の肥やしすればよい、ということでした。

このように考えると、哲学書の古典は実によい肥料なんですね。非常によく効いてきて「新しい思考」の枠組みをつくることができました。

もっとも若い人なら乱読する、というのもいいし、気に入った哲学者の本を読むというのもいいでしょう。哲学書の森に分け入り、自身の哲学の肥やしにしておくと、いつか役に立つ日が来ると思います。[2002/08/29 22:16:28]

2）今が旬の心理学

何故か私は今心理学の本を読んでいます。そこで分かったのは心理学というのは、いま旬なんですね。私は今の社会をどう変えるかという視点からしか問題を見ないのですが、驚いたのは今心理学でこの問題が議論されているのですね。６０年代は哲学と経済学がこの事を考えていました。８０年代には社会学ががんばっていました。今哲学も経済学も社会学もダメですね。でも心理学でこの問題が解けるとは考えられません。というのも心理学はあくまでも個人の意識を問題にしているのですね。でも社会を変えるというのは集合的意識です。これに答えを出せるような心理学の方法はありません。あれば教えてほしい。ということでやはり哲学の出番なんですね。[2002/09/05 23:46:29]

3）古典哲学の素養

何か自慢話になりますが一言。

私は５０代後半になって、ドイツ観念論の哲学の虜になり、それまで嫌いだったカントが本当に言いたかった事が分かってきたりしたのですが、この時の哲学研究が、今の心理学研究に非常に役に立っています。と言うのもミードやピアジエやワロンといった古典的な心理学者は皆哲学に堪能で、哲学の知識が無ければ彼らの本は理解不能なんですね。そして現代の大学で心理学を教えている心理学者には哲学の素養のある人はまれです。彼らにはこれらの古典はチンプンカンプンでしょうね。哲学の効用はこんな所にもあります。[2002/11/14 00:15:16]

4）ワロンの情動論

私は社会がどのようにして作られているかについて興味を持ち、いろいろ考えてきました。

社会契約説が一番普及していますが、人類史上の最初の社会で契約が可能だったとは考えられません。その社会には言語も発達していなかったでしょう。デュルケムは宗教が最初の社会だと主張し私もそうかもしれないとは思うのですが、彼は宗教がどのようにして作られるかについては述べていません。最近ワロンを読んで彼が、情動（エモーション）を社会の形成力と見なしている事を知りました。知はこの情動が作り出す社会性の上に乗っかっているというのです。でも言語が発達することで、社会の中で知の優位性が確立されました。というのは、情動は人に伝わりますが、それは言葉によらないのですね。言葉にすると曖昧な表現になりますから、一ランク下位のものとされてしまいます。

情動の伝え合いを大切にする事からもう一度社会を作り直す事が問われているように思います。

あるいは情動の果たす役割りを踏まえた知でしょうか。哲学は自己否定しないと効かないのかもしれません。[2002/12/19 23:23:29]

（C）同一性と差異性

1）政治的センスをみがこう

タイトルは哲学のテーマですが哲学はやりません。政治的センスを取り上げます。政治的というと日本では、人をだますとか、無責任と言った悪い意味で使われる事が多いですが、ここでは、集団をうまく組織して行く能力という本来の意味で使います。

さて、この掲示板には色々な年代の人が書き込んでいます。人間は悲しいかな自分の持つ観念に合せてしか、外界（他者も含む）について了解する事はできず、かつひとは皆それぞれ唯一性をもち各人各様の観念を持っているから、その了解には必ず誤解の部分を含む事になります。

そこで問われるのが政治的センスです。６０年代の安保闘争や７０年代の全共闘運動に関わった人たちは、意思の中での同一性の部分（安保反対とか大学解体とか）が大きく、従って議論する場合、差異についてトコトン論じ合いました。そうする事で、同一性の内容をより強く意志統一していたのですね。

ところが７０年代後半からは、運動の場面ですら、同一性の領域が縮小して行きました。「大きな物語」はダメで、シングルイッシュー（ごみの処分場反対とか、安全な食品がほしいとか）にもとづいた運動が多様な形で起きるようになりました。そして社会状況としては「新人類」という言葉に象徴されるように、それぞれの個性（差異）が同一性よりも上位に来るようになったのです。

８０年代後半からは、政治運動らしい運動は起こらず、新しい社会運動（刷新された協同組合運動も含む）が起きてきますが、時代をリードするほどの力はなく、社会状況では「オタク」が登場し、新興宗教のブームがおきます。現在まで続くこの時期に個性（差異）が神性にまで高められ、個の唯一性が人間のアイデンテイテイとなっているように私には思われます。こうなると同一性の領域は意識されなくなります。

このような状況で、差異に付いて議論すると、同一性の領域がないものですから、人々は単に干渉されたとしか感じません。「地球村」という環境NGOがありますが、ここの人たちは「批判はしない、気づくのを待つ」という新しい政治的センスでもって、安保・全共闘世代の差異を議論する政治的センスに対抗しました。これはこれで一定の正当性がありましたが、しかし、同一性に付いては思想的なものに限定されているように思われます。

この掲示板では「引きこもりの社会参加」という同一性があります。それに新しく、ワーカーズコレクテイブという問題が付け加わりました。この同一性に付いて確認しあえる人々のうちでは、差異に付いての議論がうまく機能し、同一性の内容を豊かにして行くでしょうが、そうでない人々に対しては、差異に付いての議論がうまく進まない。

そこで差異性は残しつつ、同一性に付いての議論を進めて行くという政治的センスを期待します。異なる言語を持つ話者が互いの理解を収斂させる時のように。[2003/01/30 16:18:36]

相互の理解を収斂させる、と私は書きました。それが意見を収斂させるというように受け取られてしまっています。これはまた別の事ですね。私はこの掲示板では、とりあえず、理解を収斂させる事を共通の了解事項にしてほしいと思います。意見の収斂は実現すればすばらしいですが、それを目的にはしない方がいいように思います。[2003/01/31 22:49:46]

2）ワーカーズ、コレクティブは自衛

60 年代までは、日本で人々は集団で生活していました。ところが 80 年代以降はもちろん皆集団に属しているのですが、帰属意識がなくなったようです。生活のほとんどがお金で解決するので他者に頼る必要がなくなったのですね。家族も単なるねぐらで皆別別に生活している。自立した個人という意識が生まれ、他人に頼らず生きて行くことが美徳とされる。でもお金は実はものを介した人間の関係なんですね。しかしそのようには見えず、生活のためにはお金があればいいと考えてお金に執着します。お金にはお金の法則があり、これは人間的な関係とはズレています。お金のいう事に従えば人間的な関係が損なわれるといった事態も生まれます。

こんな状態で今日の人々は集団で生活する力を失っているように私には思えます。バラバラな個人が集められているだけで集団として機能していない。集団に属している人たちがワーカーズコレクティブを作るのではなくて、バラバラの個人が集団を作ろうとしているのですね。この意味では皆「小市民」です。あるいは自営業すら出来なくなっている「小市民」ですね。もう集団を作って自衛するしかないのでは、と私は考えています。[2003/01/28 20:51:46]

（D）現代人の自己神格化

1）お金による意志支配

現代人は自己神格化を余儀なくされている、というメッセージをどこかに書き込んだように思います。この問題について考えてみたいと思います。

自己神格化とは自分自身が神にされてしまって、神としての意識を持っている、と言うくら

いの意味とします。そこでまず神とは何か、と言う事が問題になりますね。私は人間の本質を個人を越えた類的な力と見、これを神的な力と見たフォイエルバッハの考えに同意します。

宗教上の神とは、この人間の類的な力が人間から分離されて、人間に信仰を要求する外的な力となったもので、人間の自己疎外なのですね。彼は「神は全ての疑いを解く無知である」と言う気の利いた事を述べています。

ところで、私は「哲学は効くか」で「全て人間は哲学者として生を受けている」と書きました。また「哲学が効いた」では「哲学は自己否定しないと効かないのかもしれません」と書きました。この書き込みは、実は現代人の自己神格化と言う私の見立てと関連しているのです。

現代人の自己神格化がなぜ生じたか、と言う事を論じようとすれば長くなってしまいますので、はしょって説明します。生まれたばかりの新生児は、家族とのつながり無しには生きて行けないように、成人になっても人間は他の人々との社会的つながり無しには生きて行けません。

そしてこの社会的つながりが、約２００年前にはそれしかなっかった共同体的なつながりと言う人間くさいものから、だんだん、お金と言うドライな物的関係へと置き換えられて行ったのですね。

お金自体は物の関係をとった人間の関係です。しかし、例えば他人の商品をお金で買う場合、これはもともと自分が働いてお金を稼いでいたから出来たのですが、お金を使うと、自分の働きではなく、お金そのものに他人の商品を買う力があるように見えます。何かしら、あたかも商品やお金に自己意識があり、人間はそれに自分の意志を宿して生活するようになっていますね。手持ちがなくなればアルバイトにいかなければならない、ということも、お金に命令されていると考える事ができます。お金は商品の世界では、何でも買える万能選手ですから神の座にあります。このお金に自分の意志を宿したとき現代人の自己神格化が始まると私は見ています。

現代人は良く「自立せよ、他人に迷惑をかけるな」と教育されています。この美しい言葉の裏には「お金の奴隷になれ」というメッセージが隠されています。というのも、今日、自給自足で暮らせる人はごくわずかで、たいていの人は、雇われて働かなければ「自立」できないからです。そしてお金があれば、人生のほとんどの問題は解決できるようになっていますから、もう、自分は人間の類的な力を持ち、神的な力を待った存在だと思い込む他はないのですね。

こうなると、自分の意識について考える哲学など無用の長物のように思え、今さえ楽しく過ごせたらいいという、マスコミの広告に順応して生きて行ってしまいます。

でも、自己神格化されているとはいえ、この「神」には本当の所全能の力はなく、ポケットのお金で評価されてしまう、実際には悲しい神なのですね。その上他人に頼れないから孤独でさみしい。そんなこともあって、この自己神格化を余儀なくされていることに嫌悪の感情をもつ人たちが増えて行っているのですね。
[2003/02/07 00:24:47]

2）ディベートの試み

「お金を使う現代社会を肯定的に捉える」と言う事は、バブルの頃までならともかく、今は非常に難しいですね。今は本来企業にお金を融資する事を事業としてきた銀行が自己資本率を上げるために貸しはがしをして、優良な企業を資金ショートさせて倒産させているし、そのもとは株価の下落による銀行の資産の目減りなんですね。今はお金の悪い所がドットでて来ていて、それで地域通貨の試みがいろんな所で為されたりしています。

もしお金を擁護するとしたら①お金持ちはドンドンお金を増やせるがその他大勢は貧乏になり大金持の天下になります。②大金持になるとなんでも出来ます。特に政権と結びついて、弱い国に爆弾の雨を降らす事が出来ます。③大金持になると財団を作って色々なプロジェクトに寄付をし、弱者を救済したり、環境問題に貢献できます。

今日お金を擁護するとしたらこんなブラックユーモアのような事しか思い浮かびません。エンデは物を交換するお金と利子を取るお金とを区別しました。私が擁護したのは利子を取るお金です。と言うのも今日利子を取るお金が物を交換するお金の上位にあるからです。銀行のせいで企業が倒産を余儀なくされている、と言う事がその証拠です。

これでは期待に添えないかもしれませんが、今お金の長所を述べるのは難しいですね。
[2003/02/08 00:12:02]

先の書き込みではちょっと味気ないので昔を思い出して商品経済のいい所を書きます。

①商品経済が発達する事で人間の政治的平等が実現しました。いわゆる身分制があり移動もままならなかった封建制が打破されたのですね。でも今の人たち、どれだけ旅行しているでしょうかねえ。江戸時代の農民と変わらなかったりして。雇われていると言う事も本百姓と比べてどれだけ生きやすいでしょうかねえ。政治的平等というのは経済的平等とは違うのですね。現代人は政治的平等は得ましたが経済的には封建時代の農民よりももっと縛られているのではないでしょうか。

②市場が発達する事で、人々は社会全体をどうするかを考える必要はなくなり（昔の共同体は全体の事を考えて、土地の利用や水利の計画を立てていました）自分個人の利益になる事だけを追求すればいい。市場の見えざる手が全体のバランスを取ってくれる。これも今はウソになりましたね。銀行が泣かされている不良債権には見えざる手は働きませんでした。

③資本主義になって初めて科学技術が発達し便利な生活が実現した。おそらくこれが一番皆に支持されている理由でしょうね。生産力はものすごく発達しコンピュータまで出来てインターネットで色々な事が出来る。おそらく生産力を発達させられなかったら、資本主義はもたなかったでしょう。でもこれが今生態系を撹乱して地球上の生物の生存の危機を招いているのですね。

何かいい所を書こうとしてもつい限界を書いてしまいます。

本当のいい所は商品や貨幣に自分の意志を宿せる、ということでしょうね。人間は何かに順応する事になれているのですね。他人の意志に従う事は今の人には耐えられませんが、商品や貨幣の言う事には素直に従うのですね。でもこれも「ひきこもり」の人たちが大量に出現する事で万能ではなくなってきています。やっぱり今の社会は黄昏時を向かえているのではないでしょうか。反対意見はありますか。あれば貴重な意見として伺います。

なおお金は資本主義が生まれる前からありました。資本主義が生まれた事で、お金に、単なる交換手段の他に、人を雇って働かせて利潤を得る資本の機能が備わりました。その上利子を生む利子うみ資本が発達し信用制度が出来ました。お金を交換手段に限定すればかわいいものかもしれませんがそのような素朴なお金は今はありません。さらに今お金を儲けようとしたら企業家でなく、投資家になって、投機に手を出さないとだめなのですね。でもこれは必ずリスクを負っていつか大損をするでしょうね。ベンチャービジネスの旗手達もそうなりましたね。暗いはなしですみません。[2003/02/10 01:06:42]

3）神的思考法の解毒

ちょっと間が開きましたが、最初の書き込みの続きを書きます。

自己神格化は、雇われて働き、お金で生活している限り避けられない、とすれば、これが嫌になった人は、ダメ連ではないが「ダメをこじらせる」と言う事になりますね。しかも神はいやだから人間に戻ろうとしても、人間的な社会的つながりは独りでは紡ぎ出せませんから、容易には戻れない。せいぜい「まったりとした時間」をすごす事で一息つくしかない。となれば、せめて頭の中だけでも人間的になれないのか、ということについて考えたのが、「哲学は効くか」でした。神的な思考法としてある自己絶対化から、人間的な思考に目覚めることは、

そんなに難しい事ではないと私には思えたのです。

カントの『純粋理性批判』（岩波文庫）中巻の超越論的仮像論と出会う事で、相当のことがわかります。カントはヒュームらの懐疑主義の批判を行ったのですが、それは、存在するものがあって、そこから人間の観念が生じると言う懐疑論の前提そのものをひっくり返し、人間は自分の観念に基づいて存在を捉えるのだと考えたのでした。このカントのコペルニクス的転回によって、人間の理性の限界が示されたのです。

原因と結果といった因果関係や法則性と言ったものはすべて人間の理性に属するものであり、人間の思考がこのような観念をもっているから、対象を原因と結果を持った法則的なものと捉える事が出来るが、しかし、対象そのものにこれらの属性がある訳ではない、とカントは主張したのです。その上で、人間の理性が必然的に陥る錯覚として上記の事がわかっても、対象が法則をもっているかのように思い込んでしまう、と言うのです。

このようにしてカントは人間の理性の働きの中に、理性そのものの合理性をあたかも存在の合理性と考えてしまう取り違えがある事を指摘したのです。ところで自己絶対化の思考構造とは、自分の思考の働きで捉えたものが他者の存在様式だ、ということを固く信じている、と言うものではないでしょうか。カントのように「物自体は認識できない」とまで言う必要はないですが、カントの超越論的仮像論は自己神格化している現代人におすすめの一服です。頭の中を変えるだけでは問題は解決しない、身体は、行動は、といった事に付いては別の機会に書きましょう。[2003/02/13 23:50:34]

カントの超越論的仮象論についてはカント研究者の間ではずっと無視されてきました。これに注目した研究者は少数派で、手じかに参照できるのは石川文康『カント入門』（ちくま書房）くらいです。カントのこの見解が無視されてきた理由は、科学技術の発達でしょうね。ヴィーコが述べているように、科学的真理とは人間が作ったものについては妥当するが自然については妥当しない。ところが現代社会は人工物で取り囲まれているのですね。この領域では科学的真理は妥当します。だからついこの事が自然にも妥当すると思い込んでしまうのですね。それに学校教育で、科学的真理が自然の法則の解明であると教えられますね。このような考えの再検討がいま問われています。[2003/02/15 22:51:08]

（E）差異性と唯一性

1）唯一性の新しい捉え方

同一性と差異性というテーマで始めた時に、次のテーマを差異性と唯一性に定めていましたが、なかなかそこに行けそうにありません。ただ他の書き込みを見ていると、政治的センスが洗練されてきたように見えるのは私の思い込みでしょうか。でもまじで、喧嘩してるほうが実りが多かったりして。[2003/03/09 22:34:08]

個の唯一性ということは従来宗教家が言ってきた事です。彼らはこの事実を存在の神秘性から説明し、神への信仰を勧めます。私は唯一性の新しい捉え方を考えて、自己絶対化の解毒剤としたいのです。人間に限らず万物はかけがえのない唯一の存在ですが、その神秘性にとどまるのではなく、唯一性を持った個人が関係し合う事で人間や社会が創られる、という事に注目したいのです。宗教は関係し合う前にそれが前提されていますね。そうではなく、関係の作り方としての人間性というように考えてみたいのです。このように考えると現代社会では個人は結構無理強いされる形で社会参加している事が見えてきませんか。[2003/04/05 23:08:40]

2）唯一性と民主主義

同一性と差異性という時、それは統一物の対立という意味で、元々同じ物の別の面という事でした。これに対して唯一性というのは同一性を考慮しない絶対的他者と考えましょう。この差異性と唯一性の違いに注目し、ここから人間や社会を捉え返してみましょう。差異性の見地からは人間や社会といった同一性を前提にして個々人の差異（個性）がある、という事になります。ところが唯一性の見地からすれば、それぞれ唯一性を持った個人がお互いに関係するところに人間や社会が成立するという事になります。皆さんどちらを選びますか。[2003/04/05 22:33:48]

「哲学が効いた」と「同一性と差異性」に書き加えていて、だんだんはっきりしてきました。ブッシュとネオコンが求める同一性は唯一性の否定ですね。唯一性を持った個々人がどのような関係を作っていくか、という所に人間性や社会性が作り出されるのに、ネオコンは「同一性」を押し付けている。これでは人間性や社会性は作り出せず、彼らの主張する民主主義はその行動によって否定されている。差異を認めるのが民主主義ではなく、唯一性を認める事が民主主義の前提なのですね。[2003/04/05 22:50:17]

（F）心理学雑感

1）心理学とは何か

突然割り込みますが、フロイドやユングやラカンの心理学は科学の基準を満たしていません。たまたま大学に心理学の講座があるだけでその中味は文学と変わりません。哲学は一人一説の世界で心理学は創作の世界です。この事をわきまえて議論しましょう。[2002/09/07 23:35:51]

心理学は技能です。技術といってあげたいのですが工学ほどの確実性は認められないでしょう。でも技能といえば誉めすぎでイデオロギーと見た方がいいかも知れません。皆さんどう思われますか。[2002/09/09 22:54:23]

2）科学の概念

心理学と物理学、それぞれ、心と物の理（ことわり）を極める学問と言う事になっています。でも点や線分や質量といったことについての物理学の定義は誰にとっても一義的ですが、心理学となると肝心の「心」の定義では一人一説です。自然科学と技術が発達したことで、社会や心理にまで科学の方法を適用しようとする努力がつづけられていますが、もうやめにしたほうがいいでしょう。根本的な概念について一義的に定義できないのなら、それは科学の方法では手にあまる学問なんですね。にもかからわず科学たることを主張しているのはそうしないと今日の大学制度の下では科研費ひとつ取れないからですね。科学の方法以外の、学問の方法を解明することが問われています。[2002/09/11 02:03:24]

先の書き込み、誤解を受けそうなので一言。私は科学の概念を非常に狭く規定しています。と言うのも今日科学技術の暴走が、学問について考える時に最大のものだと考えているからです。暴走を阻止するためには科学を物理学的世界観に限定し、これを社会や心理に適用することがいかに馬鹿げているかを示したいのです。だから心理学は科学でないと言ったのも学問としての心理学を否定したのではなく、それが物

理学に媚びを売っていることを非難したのでした。学問の概念は知の体系と言う事で古代ギリシャに成立しています。科学と言うのは 17 世紀にニュートンらによって確立された特殊な学問体系のことです。この特殊なものが普遍的な方法として信奉されている今日の学問の状況に異議を申し立てたいのです。[2002/09/11 23:49:38]

(G) もう一つの働き方

1) ソ連「社会主義」をどう捉えるか

権力をとった人間は腐敗する、と言うのが人間の本質で、社会主義もこれに勝てなかった、という理解でよろしいでしょうか。私は社会主義の敗北は、政治権力をとってその力で商品経済を廃止しようと言う戦術が正しくなかったと考えています。商品と貨幣は商品所有者の無意識のうちでの本能的共同行為で支えられているので、これを意志の力で廃止しようと言う試みは所詮無理だったのでしょう。

では社会主義の試みは無駄だったのでしょうか。私はそうは思いません。ソ連や中国で革命が起きたことで資本主義も変化しました。その体制をドンドン社会化せざるを得なくなったのです。その結果現代では資本主義社会の中で次世代の社会システムが形成可能になっています。権力をとらないと社会を変えられない、と言う事ではなく、社会をドンドン変えていける時代になっているのですね。そしてこの社会を変えていく活動は非常に多様になっています。というような事を私は考えています。[2003/02/20 22:43:10]

2)「人間の本質」

いかにも偉そうな口調で書き込みますが許して下さい。

人間が作った社会的なものには大きく分けて２種類あります。一つは合意の上で作った物で、意図的に変更できるものです。もう一つは人間が作っているにもかかわらず、意図的に変えられないものです。社会や言葉や商品が代表的なものです。人間がこれらのものを作り出す際に無意識が大きい役割を果たしています。ここで言う無意識はフロイトのいう無意識ではなく物や他者に自分の意志を宿すと言う事であり、逆に言えばそれらに意志支配されていると言う事です。

社会の場合ミードが言うように他者の態度を取得するという形で意志支配が有ります。言葉の場合は意味を音（聴覚印象）に託す事で、一般的な記号に意志を宿さねばなりません。具体的な内容を一般的な形式で表現しなければならないのです。商品の場合その価格は市場の指示する所にしたがって決めざるを得ません。

さらに現代社会の主人公であるお金はなんと商品所有者達が商品を売りに出す、という行為の裏にある、単一の商品（金属の金）で全員が自分の商品の価値を表示するという無意識のうちでの本能的共同行為によって日々作り出されています。

だから「人間の本質」を意志支配されている事に求めれば、gonn の言うとうりです。でも私は意志支配される事で社会も言葉もお金も商品も続いているのだが、これがいやだ、という所に人間の本質を求めたい。その時に問われる課題は、無意識のうちに意志支配されているという現実とどう向き合うかと言う事ですね。私の解は無意識が働けないような状態を迂回して作り出すと言う事です。[2003/03/16 01:15:58]

3) ＮＰＯとワーカーズ

ＮＰＯ法人も１万団体を超えたと報道されていましたね。私の見る所行政から仕事をもらっている法人はたいてい行政の下請けをやらされているように思います。ＮＰＯエリートではなくて行政の二軍ですね。多分行政から独立している法人のほうがまともな仕事が出来るような気がします。これは社会学的調査をした訳では有りませんので、間違っているかも知れません。識者の意見を聞きたいところです。それよりも私は知的エリートが主導的な役割を果たせないような時代が訪れているような気がします。その結果知的エリート層が退廃してきているのですね。エリートが大衆を指導するという図式が崩壊しているのです。今は目立たないが、ワーカーズコレクティブで新規事業を開拓していっている一群の人々が指導性を発揮するのではないでしょうか。時代は生産の仕組みが変化するに来ており次世代の生産の仕組みを生み出す人々が主導権を握るでしょう。行政（官僚）や知的エリートは生産のシステムの寄生者です。だから生産のシステムが変化にさらされるときには指導性が発揮できない。狼さんはこの寄生者たちの動向しか見ていないように思います。知的エリートとしてではなく、一介の働き手として「もう一つの働き方」を実現する事が、１万のＮＰＯ法人の活動よりも先駆的だと私には思われます。[2003/03/16 00:29:03]

4) 個の自立を土台にした協同

私の意見は「もう一つの働き方」では精神労働と肉体労働との対立が止揚される事になる、と言う事です。だから知的エリートのあり方が変わり、寄生者にはならないのですね。あなたの言う個人的な見解だと知的エリートも寄生しようがありませんね。たまたまＮＡＭの人と話した事があり、そのとき共同体に非常にアレルギーを感じておられると言う事を感じました。「共同体」という言葉自体に違和感を感じられているようでした。でも今の日本ではそんなものはないのですから、個の自立を土台にした協同が問題になっていると思います。「もう一つの働き方」はこれを目指していると思います。[2003/03/26 23:42:21]

(H) ブッシュはなぜ戦争をするのか

1) 戦争の原因

「最後通告」の時間が切れましたが、まだブッシュの宣戦布告のニュースは入ってきません。毛沢東は「アメリカ帝国主義はハリコの虎である」と述べました。第 2 次世界大戦終了後植民地諸国の独立運動が巻き起こり、これにアメリカが軍事介入することで米・ソの「冷戦時代」が幕を開けますが、この時代のアメリカ軍の相手はおおむね人民戦争でした。毛沢東の言葉はアメリカ軍は人民戦争には勝てないという意味でしたし、実際にアメリカ軍はベトナム戦争で勝てませんでした。

ソ連が崩壊して以降、人民戦争は見られなくなりました。アメリカ軍はもっぱら自国の利益のために内政干渉や軍事介入を続けてきましたが、しっぺ返しを食らわずにやってこれました。でも世界唯一の超大国となったアメリカが何故戦争を必要としているのでしょうか。私は時代が 80 年代に入り、産業が支配する時代から利子が支配する時代へと転換したことに注目しています。60 年代のアメリカの戦争勢力は「産軍複合体」でした。今日ではこの勢力だけでなく利子を取りたてるグローバルな金融システムとしてあるドル体制を支える勢力が合流しています。

産業の時代には働く人たちの生活の権利は労働３権も含め保証されていました。でも利子が支配的になる事で働く人たちだけでなく経営者まで身包みはがれる時代になったのですね。国際通貨ドルは今や利子を稼ぐツールとなり、その横暴さが世界中に経済危機をもたらしてきました。人の生存を許さず、身包み剥ぎ取る利子主導の体制が今のアメリカの支配者達の手中に

有ります。何億人という人たちがいまこの体制の下で死ぬかア、メリカのこの体制と戦うかを強制されているのです。アメリカがこの利子主導の体制を防衛しようとする限り永遠に戦争を繰り返さざるを得ない。今回のイラクへの戦争で、アメリカが戦争を必要とする理由が明白になり、この利子主導の体制を解体する運動が起きる事で、戦争の原因を取り除く事に期待します。[2003/03/20 11:13:46]

2）アメリカ建国時の原罪

あまりにも早いアメリカの侵攻、国連の査察やイラクのミサイル放棄で丸裸になっている相手を攻めるのですから、当然の帰結かもしれません。でもアフガン空爆の時にも感じたのですが、アメリカ建国の際の原罪が今問題にされるべきです。先住アメリカ人(インデアン）を抹殺し土地を奪う事でアメリカの建国がなされました。１５０万人の先住民が殺されています。この建国の歴史を今アメリカは世界的規模で繰り返そうとしているのですね。インデアンの独立運動を支援する事はアメリカの独善に対する根源的な批判になるでしょう。南北戦争は奴隷解放の北軍の勝利で良かったと言う事になっていますが、あれは南部の独立運動であり、南部の独立を認めるような政治的センスが有れば別のアメリカが出来ていたかもしれません。インデアンがどのようにして抹殺されたかを調べて下さい。標準的なアメリカ史の文献目録を見れば容易に検索できます。[2003/03/22 23:06:57]

3）反戦運動の思想的背景

哲学の話しがいつのまにか憲法の話しになっていますが、哲学の話しに戻すと、今、義のない戦争、と言うより軍隊による大量殺人を企てているブッシュのたくらみに対する抗議行動が繰り広げられていますが、この運動の哲学的背景は何なんでしょうか。何か統一された思想的背景はないように思います。となると、哲学の歴史的使命は終わっているのでしょうか。[2003/03/09 22:13:57]

4）ネオコンの問題点

反戦運動の哲学的背景は、アメリカ、フランス、アラブ世界でそれぞれ異なっているようですね。日本では個人としての感性でしょうか。それよりも今私は戦争を仕掛けているブッシュの後ろ盾のネオコン（新保守主義）の哲学に興味を持っています。ミードは社会を形成する力を個々人の「一般的他者の態度を取得する」ことに求めましたが、ネオコンはこの同化すべきアメリカについての独自のイメージがあるのですね。それは人間を人間として見ずに、自分達の利益のための単なるツールのように見ているような気がします。この問題について詳しい人の書き込みを求めます。[2003/04/05 22:09:28]

実践的地域通貨論

リエターの「未来のお金」（邦題『マネー崩壊』）

1）グローバル基準通貨

ＥＵの統一通貨であるＥＣＵ創設の設計にかかわったリエターは、ベルギー中央銀行をはじめ複数の金融機関に席をおき、また通貨トレーダーとして成績をあげ、そして、大学の教授も勤めている、文字通り、金融の実務に明るい研究者である。彼は次第に「お金の制度は、どこかが外れている」と感じるようになり、今日のマネーシステムに代わる代案を考えるようになった。

『マネー崩壊』（日本経済評論社）で述べられている諸内容のうち、最も特筆すべきものは、第８章で取り上げられているグローバル基準通貨である。まずその内容の紹介から始めよう。

リエターは、今日のマネーシステムの問題点を考察するに当り、利子が投資に果たす役割を検討している。1000 ドルを 15 年の期日で投資し、毎年 100 ドルずつ利益が返ってくるプロジェクトで 10%の利子を払うとなると、現在価値は 91 ドルとなり、未来に手に入るお金は現在手元にあるお金よりも価値が低いことになる。その上、逆に、プロジェクトに投資せずに預金すれば、91 ドルで１年後に 100 ドルを得られる。だから預金する場合と比べてプロジェクトに投資した場合は１年目の 100 ドルが 87 ドルに評価されることになる。この例を示したあと、リエターは次のように述べている。

「あらゆる投資にこれと同じ論理が当てはまるので、社会全体としては長期的思考より短期的みかえりを優先する金融システムの圧力が生み出される。そしてその過程で、長期的な持続可能性が犠牲になるのである。」(248 頁)

このような現状の金融システムに対して、リエターは、新しいシステムの可能性について問題提起している。

「利子と資金コストを同時に下げることにより、資本のコストを劇的に減少させる貨幣制度をデザインすることも可能である。この過程によって、金銭的利害と、長期的な持続可能性とが一致することになるのである。」(250 頁)

利子が高ければ高いほど将来が犠牲にされるとすれば、逆に、マイナスの利子（お金に持ち越し料金をかける）にすれば、お金をいま受け取るよりも、プロジェクトに投資して将来受け取ることの方を選ぶ、というのが、リエターの見立てである。そして、このような効果をもったグローバルな通貨制度の可能性について考察し、次のように提案している。

「グローバル基準通貨（ＧＲＣ）とは、どの特定の国家とも結びついておらず、国際契約や貿易用に使用できる、安定し信頼のおける基準を提供することを主な目的とした通貨を表す一般的コンセプトである。ＧＲＣの換算単位の一タイプとして”物質世界と固く連係する”ことを目的とする通貨単位『テラ』を提案したい。」(252 頁)

リエターによれば、テラ通貨の価値は、国際貿易にとって特に重要な一次産品やサービスによって構成される基準バスケットにもとづく。例えば、１テラ＝１／10 バレルの石油＋１ブッシェルの小麦＋２ポンドの銅＋その他、というようにして決めておく。取引する人には、必要な通貨によってそれぞれの商品の価格を求め、それを合計することで、１テラのその国民通貨での価格がわかる、というわけである。このようにテラの価値は、商品の基準バスケットで決められるので、インフレを防衛できる。

これは、グローバルな規模でのＬＥＴＳシステムに、大企業が参加して、テラを価値基準にして口座振替で取引を行うと考えたらわかりやすい。リエターも述べているように、この通貨は、他のどの国民通貨とも新たな国際条約や合意を結ばずに、それと自動的に決済可能となる。ＬＥＴＳと異なるところは、テラが、「単に、商品バスケットが持つ価値を自国通貨で受け取る権利書であり、商品を倉庫に預かっていることを保証する一つの保管証明書である」という点だ。このような通貨が出来れば、国際的なバーター取引の基準となり、外国為替相場に左右されずに国際貿易を決済することが可能となる。その他にも、リエターはテラの効用について色々上げているが、省略しよう。問題は、このような理想的な国際交易システムが設計されたとして、それがどのようにして実現されるのか、ということにある。

実現の道は、二つしかない。一つは、ＩＭＦを発足させたときのように、世界各国の政府がＧＲＣ改革への合意を形成することだが、これは現実的に見込みがない、とリエターは見ている。

もう一つは、グローバル企業が集まって、グローバル基準通貨（ＧＲＣ）を自分たちの手で、国際貿易に携わる全ての人に対するサービスと

して設置することだが、これは前者よりも可能性がある、とリエターは考えている。

2）お金とは何か

リエターのグローバル基準通貨についての提案は興味深いものだが、結局はグローバル企業が採用しないことには始まらないものだった。リエター自身、この通貨の導入を金銭的な利害に訴える方法によらなけらば実現できないと感じているのだが、そうであれば、今日の金融システムから新しい基準通貨システムへと移行させていくような経済的諸条件が、どのように形成されているかについて見ておく必要があろう。

従来の地域通貨論は、現行の利子を目当てにしたお金の悪を告発し、そして、もっとましなものとして、複数の通貨を提案する、という類のものがほとんどであるが、肝腎なのは、現行の金融システムから次世代の決済システムへの移行のための諸条件の形成について明らかにすることではなかろうか。

その為には何よりも「お金とは何か」という問について答えなければならない。そして、リエターは、この本の第 1 章と第 2 章でこの難問に答えようとしている。そこで展開されているリエターの議論は、これまで私が目にしたもののなかでは、エンデの試論と並んで、第一級のものだ。そして、この二人の試論をもっと掘り下げれば、移行のための諸条件が何であるかが判明すると思われる。リエターの試論を掘り下げてみよう。

第2章　今日のお金、をとりあげよう。経済学の教科書ではお金が何をするかは書かれていても、お金とは一体何かについては触れられない、と述べたリヒターは、あらためて「お金とは何か？」という問を発して、「お金は『モノ』ではなく、実は無意識の『取り決めである』ことを明らかにしよう」（49 頁）と述べている。

ここで「取り決め」と訳されている原語は、agreement で、同意とか契約という意味だが、これは本来意識的な行為である。だからこの行為が無意識のうちになされているとしたら、そうと知らずに同意させられている、ということになる。そして、この意味に受け取れば、リエターの考えは全く正しい。ところが、リエターは「無意識」の方に重点を置かずに「取り決め」の方に重点を置いている。

「お金に対して、現実に役に立つような定義を与えてみよう。お金とは、あるコミュニティにおいて、ある『何か』を交換の媒体として使おうという、一つの取り決めである。」（57 頁）

このリエターの定義では、「交換の媒体として使おう」という意識が導入されている。このような定義では、アダム・スミスなどの古典経済学が貨幣に与えた定義と変わらない。もし、無意識ということにこだわれば「交換の媒体として使おう」ということが意識されない行為がお金を生成させている、と見る他はない。

リエターの試論は、商品交換を媒介するお金と、国民通貨、そして利子が付くお金との区別に気付きながら、その区別をきちんとつけていない。たしかに今日の通貨は、「常にあるコミュニティ内だけで有効」であり、そして、たしかに、日銀券は、法律で強制通用力を与えられているが、「お金とは何か」ということを考えるときには、コミュニティや通貨といったレベルは考慮の外において、商品交換からお金がどのように生成されるかを検討すべきなのだ。

とはいえ、これらの区別をつけないまま、リエターは、お金がもつ性質について、三つ上げている。第一に、お金は神秘的に見え、魔法がかけられている。第二に、お金には「権力」が与えられている。第三に、お金のシステムは、人と人との間で何かを交換するのを容易にする。お金がこのような性質をもつのは、お金が「モノ」ではなく、無意識の「取り決め」にもとづくと考えるリエターは、次のように述べている。

「現代社会において、私たちは現在のお金というシステムに加わることに、無意識のうちに同意するだけでなく、実はそのシステムに、信じられないくらいの『権力』を授けている。」（49 頁）

ここでリエターがマネーシステムと述べているのは、金融システムのことで、これに加わるには金融機関に口座を開かねばならない。だから、システムに加わるという行為は、無意識になされるものではない。無意識のうちになされているとすれば、それはこのシステムに「権力」を授けるという点だ。それはさておき、本題にかえろう。

リエターの定義に対して若干修正することから始めよう。「お金は『モノ』ではなく、実は無意識の『取り決め』である。」という定義に対しては、次のような修正がなされる。

「お金とは、『モノ』が関係者の間の無意識のうちの本能的共同行為によって、社会的な力をもったものとして生成されたものだ。」

商品所有者たちは、商品を交換しようとするとき、無意識のうちに単一の商品（金属の金）で自分の商品の価値を表示している。商品所有者たちはこの行為を、自分の商品に価格をつけて市場で売りに出すというように意識しているが、、この意識的行為の裏には、全ての商品所有者たちが、単一の商品（モノとしての金）で自分たちの商品の価値を表示する、という共同行為があり、これがモノとしての金をお金にしているのだが、これは意識にのぼらない無意識の行為なのだ。だから、リエターのように、お金は「モノ」ではない、という言うと間違う。モノでありながら、それがモノのままで社会的な力を、人々の無意識のうちでの本能的共同行為によって、付与されているのだ。ここにお金の神秘性が生じる原因がある。

簡単に言えば、商品所有者たちが自分たちの商品を売り出すために価格をつける、という行為の裏に、無意識のうちに共同して、モノとしての金をお金にしているわけだから、商品所有者たちが自分たちの財を商品として売りに出さなければ、モノとしての金はお金にはなれない、ということになる。もちろんこんなことはすぐ実現できることではないが、お金は日々の商品所有者たちの売り出すという行為によって、都度生成されているものであり、だから、それなしのシステムを設計することも可能なのだ。

3）信用貨幣（今日のお金）とは何か

お金が商品交換者の無意識のうちでの本能的共同行為によって日々つくり出されている、といっても、これはさしあたって、モノとしての金が貨幣としての金になる（形態規定）メカニズムであって、ここには銀行券の存在は考慮されていない。歴史をさかのぼると、商品所有者たちがモノとしての金で商品の価値を表示するようになったときには、金貨が流通していた。ところが、金属の金は、重いし、擦り減るし、流通手段として適したものではなかった。そこで最終消費財が売買される一般流通での小口の取引には、国家紙幣が用いられたり、銀行券が使われるようになった。今日ではほとんどの国が、中央銀行の発行した銀行券に強制通用力を与えて法貨としている。

だから、今日のお金というとき、銀行券がまず念頭におかれることになるが、しかし、銀行券とは何か、ということになると、お金とは何か、という問とは別の答えが用意されなければならない。今日の銀行券は、法貨とはなっているが、国家が発行する国家紙幣ではなく、銀行が発行する信用貨幣である。リエターはこのことをよく知っていて、信用貨幣を生み出すマネーシステムは「昔からの決済や銀行業の慣習がゆっくりと進化したのである。」（60 頁）と述べている。そのうえで、今日のお金についてこう言っている。

「私たちは、次に示すお金の基礎的な四つの要素を今でも素直に受け止めている。まずお金は無からつくられる。銀行が預金者からお金を預かって、そのお金が銀行に対する債務の形で一般人に貸出され、利子を払わせる。最後に、お金は国家に帰属する。」（16 頁）

リエターは、ここでは信用貨幣を問題にしている。信用貨幣とは、利子付きの貨幣で、預金やローンのことだ。このお金は、商品の価値を尺度し、商品の交換を媒介し、そして、価値を保存するお金とは別の、経済的関係のなかで生じている。にもかかわらず、この利子付き貨幣から派生した銀行券が、商品の交換を媒介する通貨としても機能している。だから双方は混同されやすい。でもここでは両者を区別してみよう。

お金は、大きく分けて三種の働きをする。一つは、先述した商品交換を媒介する流通手段である。これを単純なお金と呼ぼう。二つは、それで労働者を雇用して商品を生産し、利潤を獲得する資本として機能する。三つめは、お金を貸付けて利子を得ることが可能で、これが利子付きのお金だ。

利子付きのお金は、近代の資本主義が生まれる以前のはるか昔からあったが、貨幣が資本として機能する資本主義社会が成立すると、マネーシステムは資本主義に適応したものへと編成され、銀行や株式市場などの近代的信用制度が形成された。そして、今日の問題は、この信用制度の暴走が始まり、利子付きのお金の欠陥が誰の目にも明らかになったことだ。

だから今日、利子付きのお金を批判することは容易にできる。そして、リエターも非常に上手に利子の問題点を指摘している。けれども、単純なお金と利子付きのお金とをごっちゃにして論じているので、信用制度や信用貨幣についての理解が不十分になっている。

「まずお金は無からつくられる」というのは、銀行の信用創造のことで、信用貨幣には妥当するが、単純なお金には当てはまらない。そして、銀行が信用創造できるのも、それが広範な企業や人々との間に支払決済システムを張り巡らしているからだ。

中世の両替商や高利貸しも貨幣取扱業者だが、近代的銀行制度の特徴は、企業や個人といった顧客の口座を私有し、そして企業間の商取引を銀行内や銀行間での口座の振替で行えるようにしたことだ。そして、口座振替によって預金が支払手段として使われ、この預金通貨によって現代の商取引のほとんどが決済されている。だから信用貨幣を問題にするならば、この預金通貨に注目すべきなのだ。

次に銀行券だが、これは労働者やその他の階層の人々の生活のための財の売買がなされる一般流通での主役である。リエターも述べているように、その起源は、ゴールド・スミスノートに求められる。これは、イギリスの金匠が発行した金の預り証であり、今風に言えば、預金証である。そのうちイギリスの銀行は、どこでも預金を受け入れて銀行券を発行するようになった。最初は銀行が発行する債務証書の性格が強く、持参人に正貨である金貨を支払うことを約束した兌換券だった。当時の銀行は、銀行券の発行で儲けることが出来たが、そのカラクリは、これで貸付けをしたり、商業手形の割引を行ったからだ。ところが恐慌時に銀行の破産が起こり、銀行券がただの紙切れになるといったことが度重なって、発券がイングランド銀行に一元化されることになる。

今日のシステムでは、リエターも述べているように、中央銀行による銀行券の発行は、中央銀行に口座をもつ銀行が当座預金を引出すときに行われる。銀行券とは何か、と言えば、中央銀行が発行する当座預金証である。リエターはドル紙幣がもつ信用について、次のように述べていたが、これは見当違いである。

「あなたは、20 ドル紙幣そのものに『価値』があるわけではないことを知っている。あなたは、誰もがその紙を価値があるものとして受け入れることを知っているのだ。あなたが、自分の手元にある紙幣に価値がないと考えようと、『自分以外の誰もがそのお金に価値があると信じている』ことを信じている限り、そのお金を使うことができる。つまり、『相手が信じているということを信じること』がここではカギなのだ。」(54 頁)

ドル紙幣の価値は、その紙幣の生産費にあるのでなく、それがその額面のお金の預金証であることにもとづいている。実際、銀行にもっていけば預金が出来る。だから、ドル紙幣自体にそれが信用される根拠があるのであって、「相手が信じている」のもそれが預金証だからだ。

4）未来のお金

リエターが利子付きのお金を批判しようとするときに注目するのは、外国為替市場である。とりあえずの変化は、取引されている通貨の額にあらわれている。それは 98 年から 99 年の間に、1日当たり2兆ドル以上に達し、その取引額は全物産・サービスの世界総貿易の 150 倍以上、世界中の株式市場で 1 日に取引されている株式総額のほぼ 100 倍（26 頁）になるのだ。そして、この原因は、通貨が「理想的な投機の道具」となったことにあり、その歴史的な発端は、1971 年のニクソン大統領による金・ドル交換停止と 72 年の変動相場制への移行にあった。そして、この投機熱に火をつけたのが、外国為替取引のコンピュータ化と国際金融市場のオンライン化だ。このような国際金融市場の変化が利子の暴走を生んでいる。リエターは、今日の経済における利子の問題点として、次の三点を上げている。

「①利子は、マネーシステムに参加する者の間で競争を推進する。

②利子は、『終りなき経済成長』を駆り立てる。その間、実際の生活水準は停滞したままであることもある。

③利子は、少数者に有利なように全体的に税を課すことによって富の集中を生む。」（66 頁）

これら三点についての説明は、的確でおもしろいが、紹介はひかえておこう。リエターはこの利子付きのお金の世界を「競争、終りなき成長の必要性、そして富の集中」（73 頁）というようにまとめた上で、世界中で始まった地域通貨の試みに注目して、次のように述べている。

「工業時代が終わりを告げているというのは、私たちの共通する認識になっている。私たちは、新しい情報時代の海図のない海原に乗り出したところである。面白いことに、主要メディアや学者たちが気づかないうちに、世界の何十もの国々で新しいお金の実験が成功し始めている。私は、これらの革新的な動きが、暴力や革命を経ずに、現在のシステムに蔓延した行き過ぎや不均衡といったものを、ゆっくりと直していく現実的な可能性があるのではないかと考えている。」（73 頁）

今日の利子付きのお金の行き過ぎを是正していく方向として、例えば通貨を銀行券から国家紙幣に代えるというやり方がある。発券形の地域通貨はこの方向性を目指しているように思われる。しかし、国家や金融機関が、この方向に対しては妨害するだろう。

これに対して、参加者の口座振替を管理する LETS システムは、今日銀行が行っている為替取扱業務を無利子で、しかも口座開設者が取引の主体になる、という新しい条件の下にひきつぐことになる。このシステムは、企業が加われば、現行の預金通貨による口座振替の代替システムとなり、一般流通に参加する経済主体が加われば、銀行券の代替システムとなる。さらにこのシステムのもとに、リエターが提案しているグローバル基準通貨を運営していくことも可能だ。この事態が進めば、これまでの国際金融市場は、その巨額の架空資本が土台にしている現実資本部分を失うことになり、架空資本は、霧のように霧散してしまうだろう。

今日の金融市場の土台となっている支払決済システムは、私的所有の枠の内で極限まで社会化されている。オンラインのコンピュータネットワークが成立したことで、支払決済システムの私有という従来の銀行業務の基礎が掘りくずされ、メガバンクの統合が進行している。この先には、支払決済システムの共同管理という、次世代の交易システムが見えてきているのではなかろうか。

支払決済システムの共同管理が実現し、企業や家計が、主要な取引をこのシステムで行うようになれば、企業は市場向けに商品を売り出す必要がなくなる。そうなれば、モノとしての金を貨幣に転化する商品所有者の無意識のうちでの本能的共同行為もなされなくなる。そうなると貨幣は消失する。このような展望は、企業が雇用労働にもとづいて生産している現行の生産条件では困難かも知れない。雇用労働の協同組合的労働への移行の条件が、それとして考慮されるべきである。とはいえ、支払決済システムの共同管理が、例え地域的な規模であれ定着していけば、それ自体が、雇用労働の協同労働への移行の条件の一つとなるように思われる。

なお、リエターの『マネー崩壊』は、地域通貨についての紹介をしている。お金についても、正面から論じていてためになる本だが、お金とは何か、という点について批判的補足を行った。

ギブソンの『生態学的視覚論』（下）

第2章 視知覚に関する情報について

1）放射光と包囲光

ギブソンの本の第Ⅱ部　視知覚に関する情報は、この本のなかで一番理論的な部分だ。すでに見た第Ⅰ部が、環境と動物の相互関係についての新しい考え方であり、そして、視知覚を論じた第Ⅲ部が、実験による実証であるのに対して、この第Ⅱ部では、生態光学の立場が理論的に語られている。それで、この章では、ギブソンの説を詳しく追ってみることにしよう。

ギブソンは、光の科学も視覚の科学も、ともに光学と呼ばれているが、物理的エネルギーとしての光と、視覚に対する刺激としての光と、知覚情報としての光をそれぞれ区別し、次のように述べている。

「私が生態光学とよぶものは、知覚に対する有効情報に関するもので、物理光学や幾何光学とは違うし、生理光学とも異なる。生態光学は、これら既存の学問のすべてから借りるものは借りながらも、それらを乗り越えて、それぞれの学問分野の境界を横切っている。

生態光学は、物理光学ではその基礎としていないいくつかの特異性にもとづいている。つまり発光体と非発光体の区別、放射光と照明光の区別、また光源から周囲に伝達される放射光と観察者の眼の位置と考えられる媒質の一点に集まってくる包囲光を区別する。」（51～2頁）

ギブソンによれば、発光体は、それ自身の光の放射によって、そして非発光体の場合は、光源からの光の反射によって、ともに眼で見ることができるが、しかし、非発光体は、発光体と同じような仕方で眼を刺激するものではないことに注意をうながしている。非発光体は照明によって、肌理のある面として見えるのだ。

次に、放射光と照明光の区別について。

ギブソンは、物理学で研究されている放射エネルギーとしての光の性質を列挙したうえで、生態光学の水準では、主として散乱、反射、吸収のみを問題にすればよい、として、次のように述べている。

「日中、太陽の放射光の一部は、地上に平行光線で到達するが、他の一部は、決して完全に透明ではない空気中を伝達されることにより、散乱する。これを散乱反射とよぶ。（これは鏡映反射と混同してはならない。鏡映反射は入射光線と反射光線にぶっつかるとき、等角度になるという単純な法則に従っている。鏡映反射が生ずるのはまれである。というのは地面に鏡は存在しないし、鏡のように作用する水面でさえ、普通はさざ波は立っているからである。）散乱―反射光は、空からくる光を順々に反射し返す光である。そしてそれぞれの新たな反射は、さらに次々と入射光線を散乱する。このようにして、太陽や空に向かって開かれている窪み、隠れ場の中にも光は進入していく。一部が囲われた空間の中では、光は1秒間に 186,000 マイルの速度で激しく往来し続け、そのエネルギーが完全に吸収しつくされてしまうまで、隙間や裂け目を通り抜け、洞穴に入り込んでいく。この光はもはや放射とはいえない。それは照明である。」（53～4頁）

環境は、太陽からの放射光を散乱反射する物質に満ちている。鏡映反射はまれで、散乱反射によって光は環境中に進入していく。物理光学では、このような散乱反射は例外として除外されるが、生態光学では、媒質のなかを散乱反射でただよっている光の方が重要である。このように考えるギブソンは、放射光が散乱反射されて、媒質を満たしているような光を照明と捉えたのだった。

最後に、放射光と包囲光の区別について。

光を照明と捉えると、包囲光の概念が生じてくるが、ギブソンはまず、物理光学的手法で、包囲光の概念に接近しようとしている。

「地球と空の間、相対する面を何度も反射することにより、放射光は照明となる。しかし、この何度も反射するという表現は、そこから感じられるほどには、光束の想像を絶する速さ、往来する反射の無数の多様性、あるいは無限に続く散乱を、実態通りに言い表しているわけではない。物理学者と同じように、照明を光線の集合と考えれば、環境内のあらゆる面上のあらゆる点を、その点から外側へ向かう放射光線として考えることはできる。こうした放射光線束は完全に『密』である。光線を空中を完全に満たすものと考えることはできるし、空中の各点を、あらゆる方向から来る光線が交差する一点を考えることはできよう。そうだとすれば、光はひとつひとつの点を包囲することになる。光はどの点にも到達し、どの点をも取り囲む。つまり光はすべての点を包囲するものである。これは包囲光を考える一つの方法である。」（54～5頁）

放射光の概念しかない物理光学からすれば、散乱反射も放射光の吸収とその一部の反射と捉えられ、すべての点は、放射光の光源として考えられる。これを逆に、放射光を照明と捉えると、すべての点を光が包囲している、ということになり、包囲光の概念が成立する。この照明と包囲光という捉え方からは、包囲光の構造の同一性という事実が浮かびあがる。太陽が雲に隠れたりして放射光のエネルギーが変化しても、包囲光の構造は変わらないのだ。ギブソンは、包囲光の概念を与えたうえで、放射光と包囲光の区別について次のように述べている。

「放射光は照明を作り出し、包囲光は照明の結果である。放射光はエネルギー源から生ずるが、包囲光は観察点に収斂する。放射光は無限に密集した光線から成り立つが、包囲光は共通の頂点をもつ一組の立体角である。一つの点光源からの放射光は、どの方向に対しても差異がないが、ある一点における包囲光は、方向によって異なる。放射光は伝播されるが、包囲光は伝播されるのではなく、単にそこに存在するだけである。放射光は原子から生じて原子に帰るのに対し、包囲光は周囲に存在する面の状況に依存している。放射光はエネルギーだが、包囲光は情報である。」（55頁）

包囲光は、環境中のあらゆる点に存在しており、従って、動物の眼にも存在している。動物の眼に関係する包囲光は、実体としては環境からの散乱反射された放射光であるが、これを環境中の全ての点を包囲する包囲光と捉えると、環境中の包囲光の構造が浮かび上がり、こうして動物の眼に達する包囲光は、実体としてはエネルギーであるが、それが視覚に対する情報として存在していることが明らかとなる。これがギブソンが提起した生態光学の要点だ。

2）刺激作用と刺激情報との関係

包囲光が構造をもち、それ自身が情報である、というとき、ギブソンは次のようなイメージを考えている。

「包囲光が構造をもつ限り、それは周囲の環境を特定する。私がいっているのは、包囲光がなんらかの情報を含むには、観察点における光は、さまざまな方向において異なっていなければならない（あるいは異なった方向において差異がなければならない）、ということである。その差は主として強度の差である。構造を備えた包囲光を記述するために使われる用語は、包囲光配列である。これはある種の配列、つまりパターン、肌理、あるいは布置といった種類の配列を意味している。この配列は部分を備えていなければならない。包囲光は等質でも空白でもあり得ない。」（56頁）

包囲光配列とは、異なった肌理や色彩をもった面の配列であり、従ってそれは環境中の面の配列についての情報を提供する。包囲光が構造化されない場合もあり、例えば深い霧の中や、

暗闇の中では、背後に環境があるかも知れないが、それについての情報はかくされている。ところで、ギブソンが「情報」というとき、独自の内容をもっている。まずギブソンは、刺激作用と刺激情報とを区別している。霧の中では人間の眼の網膜上には像は形成できない、という例を引いて、網膜と眼のちがいについてギブソンは次のように述べている。

「この仮説的場合は網膜と眼の違いを示している。つまり受容細胞と知覚器官の違いである。受容細胞は刺激されるのに対し、器官は活性化される。刺激情報による眼の活性化がなくても、光によって網膜は刺激されうる。実際、1個の眼は二重器官の一部であり、一対の動く眼の一つである。眼は動かすことのできる頭にあり、場所を変えて移動可能な身体についている。これらの器官は階層をなし、私がいうところの知覚系を構成する。このような系は決して単純には刺激されないが、その代わり刺激情報が存在すると活動を開始する。」(58頁)

ギブソンが、仮説的場合と言っているのは、霧の中でも眼には光が入ってきているが、しかし、それは網膜上に像を結ばないので、知覚に関しては、光が入ってこない場合と同じだ、というものだ。ギブソンによれば網膜は光受容細胞であり、これは光によって刺激されるのだが、知覚器官としての眼、それは知覚システムの一部分であるが、そちらの方は活性化されない、というのだ。こうして、刺激作用と刺激情報の区別の重要性が引き続いて述べられている。

「受容細胞に対する刺激と視覚系に対する刺激情報の区別は、次の点で決定的である。受容細胞は、完全な系の一つの器官に過ぎない一つの眼、受動的で、要素的な解剖組織上の構成要素である。感覚の伝統的概念は、この新しいアプローチではほぼ完全に放棄される。光による刺激とそれに対応する明るさの感覚が、視知覚の基礎であると伝統的には考えられている。神経の入力は大脳の知覚過程を作動させるもとになるものと考えられている。しかしながら、私は全く別の仮説を立てる。なぜならば、刺激そのものは情報を一切含んでおらず、明るさ感覚は知覚の要素ではなく、また網膜の入力は大脳がそれにもとづいて作動する感覚要素ではないことを示唆する証拠があるからである。

視知覚は単に刺激作用の欠如のみならず、刺激情報が欠けても成立し得ない。等質の暗闇では視覚は刺激作用の欠如のために生起しないし、等質的包囲光配列の条件では、適切な刺激作用とそれに対応する感覚があったとしても、情報の欠如のために視覚は生じない。」(58頁)

ギブソンは、ここで網膜に対する入力光の刺激が脳に伝達されて、知覚される、という伝統的な感覚の理論を否定し、刺激と刺激情報とを区別することで、新しい知覚の理論を提出している。網膜上に像を結ばない霧の中でも、入力光の刺激はある。しかし、この入力光は刺激情報を含んでいない。ところが、日常的な包囲光配列に対しては、知覚器官が活性化され、知覚と行動が引き起こされる。次に、ギブソンがこの自らの新しい理論の見地から、伝統的な説をどのように批判していっているかを見てみよう。

3）刺激の概念の再考

ギブソンは伝統的な知覚理論を、感覚から知覚が生じると捉えるものであり、そして視覚に関しては光の刺激を感覚し、それが脳の働きで知覚にまとめられる、というように定式化している。この理論が前提にしているのは、「光以外に何も見ることはできない」(58頁)ということだ。

眼をカメラにたとえると、放射光が入力し、網膜でこれを受容し、この光の感覚が視知覚の根本的基礎であり、質媒であり、与えられたものだ、ということになる。この考え方からすれば、「我々は面や対象や環境を直接に見ることはできない。ただ間接的に見るのみである」(58〜9頁)という結論になる。

このような考え方に対して、ギブソンは、「我々は光を見ることは決してない」(59頁)という主張を対置している。

「確かに虹、スペクトルを知覚することはできるが、この場合も光を見ているのではない。太陽や月の暈、水面の光の輝き、さまざまな種類の閃光はみな、光の現われであるが、光そのものではない。我々が照明を見る唯一の方法は、ビームが当たることによってであると私は考える。我々は空気中の光とか空気を満たす光を見ることはない。もしこれらのことがすべて正しいならば、我々が見ているものは、環境ないし環境に関する事実であり、光量子や波長や放射エネルギーではないと主張するのは、まさに理にかなっている。」(59頁)

人は単なる光を見るのではなく、光のあらわれを見るのであり、これは光を照明と捉えることだ。そして、光を照明と捉えると、環境は包囲光配列として構造化されたものとなり、刺激情報となる。太陽を見つめるときに感じるまぶしい感覚は「強烈な刺激によって与えられる苦痛に似た眼の状態を知覚している」(59頁)のであって、決して光を見て、それを感覚しているのではない。

「我々が知覚しているのは、原因となっている光ではなく、過度に刺激されている事実、つまり、世界についての事実とは区別されるような身体についての事実を知覚するのである。そして身体に関する事実につき経験することは、世界についての事実を経験することの基礎ではない。」(59頁)

この分析はすばらしい。生命や社会は、自然物を土台にしつつも、その自然物そのものに生命や社会がなければ存在しようのない新しい事象が乗っかっている、ということをギブソンは視覚の分野で発見したのだ。たしかに光の入力がないと視知覚はありえないが、しかし、視知覚は光そのものを感覚することにもとづくものではなく、光が担っている生命にとっての情報が知覚されるのであり、そして、その情報は、放射光を包囲光配列と捉え返すことで明らかとなるのだ。

「用語の正確な意味での光そのものは、決して見ることがないならば、環境を見ることが、光そのものを見ることに依拠することはあり得ない。矛盾しているように聞こえるが、網膜における受容細胞の刺激作用を知覚することはできない。この受容細胞を刺激することによりもたらされると考えられる感覚は、知覚に対するデータではない。刺激作用は見ることの必要条件であるだろうが、不十分条件ではない。ただ受容細胞の刺激作用だけでなく、知覚系に有効な刺激作用が存在しなければならない。」(59〜60頁)

光による網膜の刺激という面だけでは知覚は生じない。光そのものが刺激情報を担っていて、これが知覚される。だから生命体による視知覚を論じる際には、光による刺激ではなく、刺激情報とは何かを明らかにすることが問われるのだ。ギブソンはこの問題を解明する際にまず、刺激の概念の再検討から始めている。

「観察者の受容器が刺激されるだけであり、また、観察者の感覚器官は刺激されているのではなく、活性化されている」(60頁)という仮説をたてて、刺激についての諸説を検討したのち、ギブソンは「こうした厳密な意味での刺激は、その刺激が世界のどこから生じているのか、その源泉に関しては何の情報ももたらしはしない。つまり刺激の出どころを特定しないのである。構造化された配列を作り、時々刻々変化する刺激だけが、刺激の源泉を特定する」(61頁)と述べている。

刺激とは結局自然物そのものが生命体ともつ関係であるが、生命体にとっては自然物そのものを知覚するのではなく、その意味を知覚するのであり、こうして、自然物そのものが、生命体との関係では、意味を担った自然物として、二重物として現れている、という自然物の二重性について、ギブソンは述べている。自然物の構造化された配列と変化する刺激が、自然物が自然物のままで生命体との関係でもつ意味なのだ。

刺激情報についてのこのような考え方からは「知覚は刺激に対する反応ではなく、情報抽出という行為である」(61頁)という新たな知覚論が成立し、「知覚は感覚を基礎とはしていない」(62頁)という伝統的な知覚論の転倒がなしとげられる。そして、情報の概念も刷新される。

「刺激情報は、それが観察者によって取り込まれるときに、環境から失うものは何もない。

情報の保存のようなことは一切ないし、情報の量に制限もない。包囲光、振動、接触、そして化学的作用における有効情報は無尽蔵である。」(62頁)

ギブソンの考えに従えば、自然物そのものと生命体との関係が刺激であり、そして、自然物そのものが生命体との関係でもつ二重性が刺激情報だ、ということになろうか。「刺激それ自体はそれ以上何も特定せず、何の情報も含んでいない。しかし、刺激作用の流動する配列は全くこれとは別である」(62頁)と述べて、次に刺激情報についての考察に移っている。

「包囲光は構造を持っている。二重視覚系(両眼があること)の目的は、この構造を取り込むことにあるといえる。さらに厳密にいえば、変化する構造の中にある不変項を取り入れることを目的としている。包囲光は通常、我々がパターンと変化とよぶものでみちている。網膜像はこのパターンと変化の両方を取り入れる。そして一つの網膜像はその受容面の刺激作用を含んではいるが、しばしば仮定されるような、刺激のセット、もしくはひと連なりの刺激を含んではいない。」(63頁)

放射光という自然物を生命体の眼との関係で捉えると、それが照明という新しい規定を受け取り、眼に入力されるものは、放射光でありながら、眼との関係では包囲光としての意義をもち、そして、この包囲光は構造をもつことで、生命体にとっての意味を示している。その際、包囲光の構造の中の不変項を検知することが重要となる。このような見地から、ギブソンは、網膜上の伝統的理論についての批判を試みている。

4)網膜像の伝統的理論

ギブソンは「眼は包囲光の不変な構造を記録する」(63頁)という新しい考え方を提起したが、伝統的な理論は「眼は眼底上に対象の像を形成する」(63頁)というものだ。

伝統的理論はケプラーにまでさかのぼると、眼に入力した放射光はレンズにより網膜上に像を形成する、というもので、この理論はカメラに実用化されたし、凸レンズがあれば容易に実験できる。これは、対象とその像との間には1対1対応がある、という考えで、幾何学の概念に合致している。この理論は網膜上の像をそのまま見る、と考えるか、あるいは神経細胞のシグナルに変換されて脳に送られて、知覚になる、と考えるか、どちらかであるが、ギブソンは二つの考え方を双方とも否定している。

まず、網膜上の像がそのまま脳に伝達されるという考え方について。

「この理論は、スクリーンや表面上に投影され、見ることを目的とする像に対しては効力を見事に発揮する。しかしながら、これがうまくいったことが、網膜上の像は一種のスクリーンに投影されていて、それ自体見ることのできるような物、つまり絵のようなものだと信じ込ませてしまっている。それは心理学の歴史上、最も魅惑的な虚像の一つ、網膜像は見ることのできる何かであるという過ちを導いている。」(65頁)

次にシグナルに変換されて脳に送られる、という考え方について。

「この考え方からすれば、物と像との間の1対1対応に類似した、像と脳の間の、要素対要素対応を考えることになる。この考えは、脳の中で網膜像を見ている小人を想定する誤った論法を避けているように思われるが、私が、感覚に根拠を置く知覚理論とよぶ理論の問題を何も解決してはいない。網膜上の光のスポットと脳における感覚のスポットの間の対応は、明るさと強度の、また、色と波長の対応関係があるのみである。もしそうだとすれば、脳は明るさと色のさまざまに異なるスポットから現象的環境を作り上げるという途方もない課題に直面することになる。」(66頁)

伝統的な視覚論のこの二つの考え方は、ともに、自然物そのものとしての放射光が眼に入力し、それがいかにして認識されるか、というように問題をたてている。これはカメラのような人工機械では全く正しく実現されるので、人間の眼もそうだ、というように考えられてしまう。しかし死んだ、人工物としてのカメラには正しくとも、生きた生命体の眼には通用しないのだ。ギブソンはこれらの考え方をあっさりと否定している。

「知覚活動を考えるとき、何かが視神経に沿って伝達されると仮定する必要はない。また、網膜に投影された逆さの像、あるいは一種のメッセージが脳に伝えられると信ずる必要はない。我々は視覚を知覚系として考えることができる。脳はこの系の一部にすぎないし、網膜入力は眼球調節作用を喚起し、網膜入力を変えていく、というようになっているので、眼もまたこの系の一部である。そのプロセスは一方向的伝達ではなく、内環的である。眼ー頭ー脳ー身体からなる系は、包囲光の構造における不変項を記録する。眼は、像を形成し伝達するカメラでもなく、また、網膜は、単に光の指によって打たれるキーボードでもない。」(66頁)

伝統的な視覚論の批判はほぼ完璧である。カメラ式の認識とは別の知覚がどのように形成されるのか、それが問題である。「不変項の記録」は一体どのようになされるのだろうか。

この問題に取り組む前に、ギブソンは、人間の眼とは構造も機能も異なる昆虫の複眼との対比で視覚について論じている。複眼の場合、網膜はなく、像も結ばないが、しかし、昆虫は環境を知覚している。そこで、包囲光配列と不変項の抽出という考え方からすれば、複眼で何故足りるのかがわかる。

さて、先の問題についてであるが、「異なった方向から入ってくるさまざまな異なる光の強度を記録することが、視知覚にとっては必要なのであり、網膜像の形成は必要ではない。」(67頁)とギブソンは結論づけているが、その際、刺激情報としての包囲光配列が情報としての意義をもつ、というとき、通常の情報の概念とは異なることについて明らかにしている。

一般に情報というと、コミュニケーションを通して伝えられるものだと考えられている。情報とは、送り、かつ受け取られる。ところが、知覚に関する情報はそうではない。

「我々を取り囲んでいるエネルギーの海にある有効な刺激情報は、これとは全く異質である。知覚に関する情報は伝達されることはなく、シグナルから成り立ってもいない。情報の送り手と受信者を必要としない。環境は、そこに生きている観察者とコミュニケーションをしない。いったい世界は、我々と話をするのだろうか。」(68頁)

ここでギブソンが問題にしているのは、次々と出てくる光学的配列から出てくる光学的情報であるが、これは伝えることも受け取ることもできない。これは、コミュニケーションの用語としての情報とは全く別の概念をもつ。ではそれは、一体どのようなものだろうか。ギブソンは包囲光配列を詳しく研究することで、この問いに答えている。

5)包囲光配列の特徴

包囲光配列についてのギブソンの説明は、個々の問題では理解可能なのだが全体のまとまりがわかりにくい。とりあえず、ギブソンの説明を要約してみよう。

「生態光学の中心概念は、観察点における包囲光配列の概念である。配列があるということは布置をもっていることを意味するし、一点において包囲しているということは観察者が占有する環境内の一つの位置を取り囲んでいることを意味している。その位置は、観察者によって占有されることもあるが、占有されないこともある。さし当たっては占有されていないものとして見なすことにする。」(70頁)

この書き出しから始まる包囲光配列の章で、ギブソンはまず、包囲光はどのように構造化されているか、ということについての予備的考察を行っている。従来、環境の配列は、地の上の図として考えられてきたが、この場合、光学的配列にひとつひとつの形が対応することになる。ところが、包囲光の配列は、ある対象が他の対象の背後に隠れていたりしていて、1対1的に対応していない。ではどうするか。

「一点で交わる一組の光線としてではなく、共通の頂点を有する立体角の入れ子構造的になった階層として光学的配列を考えることには、利点がいくつかある。立体角はすべて、どんな

小さくても、その断面図が形態をなすという意味で、形態をもっている。この点で立体角は光線とは全く異なる。」(72 頁)

ギブソンは、地と図という考え方の代わりに、一つの点を共通の頂点とする立体角が入れ子となった階層というモデルを提案している。

「このように考えると、光学的配列の構造はすき間がなく、個々の点や斑点から成り立っているのではない。光学的配列は、完全に埋められている。どの構成要素もより小さい要素から成り立っている。どの形態も、それがいくら小さな形態であっても、その境界内には別の形態が常に存在する。これは包囲光配列がマトリックスというより階層に似ていることを意味していると同時に、配列が、それぞれ位置をもち、それぞれ一定の強度と頻度を有する光の斑点の一セットとして分析されるべきでないことをも意味している。というのは、位置関係は、たとえば、方位角と仰角の角度で決まるのではなく、包摂関係により決まるからである。」(74 頁)

ギブソンのここでの説明は分かりにくいのだが、ひょっとして、思惟抽象（分析的抽象）と事態抽象（綜合による抽象）との差異について述べようとしているのではなかろうか。そうだとすると、光学的情報は事態抽象によって成立していて、思惟抽象によっては捉えられないことになる。

外界を地と図と捉えたり、マトリックスと捉えて、形という抽象の産物が外界の図と 1 対 1 的に対応している、と考えるのは、思惟抽象の働きである。これに対して、外界の対象がお互いに入れ子になっていて、それらの相互関係のなかで、形という抽象物が成立し、これが包囲光配列の構造をなす、と考えると、ギブソンの説明が分かりやすくなる。階層や布置や変化のなかの不変項や包摂といった用語は、包囲光配列が事態抽象によることを説明しようとして使用されているのではなかろうか。

包囲光配列が外界の事態抽象にもとづく刺激情報だ、と捉えると、観察者としての動物が移動する場合の光学的配列の変化についてのギブソンの説明もわかりやすくなる。

「いうまでもなく観察点が動くにつれ、光学的配列は変化する。しかし完全に変わるわけではない。配列のある特徴は変わるが、他の特徴は変わらない。変化は観察者の移動により生じ、無変化は環境の面の不動の配置により生じる。それゆえ、無変化は環境の配置を特定し、その配置に関する情報となるが、一方、変化は移動を特定し、別種の情報、つまり移動それ自体に関する情報となる。そこで普通の包囲光配列の 2 種類の構造を区別しなければならない。それらを遠近法構造と不変構造とよぶことにする。」(77～8 頁)

もし、外界の知覚が、地と図という分析的抽象によるモデルにもとづくとすれば、観察者が移動するとき、その一瞬一瞬にモデルの変形を観察者がしていかなければならないことになる。これに対して、包囲光配列が外界の事象そのものによって事態抽象されるものと捉えれば、観察者の移動がどのような経路をへようと、そこにはすでに刺激情報が待ち構えていることになる。このような事態抽象の帰結としての包囲光配列について、ギブソンは 2 種類の構造を区別し、遠近法構造と不変構造と名づけている。

「遠近法構造とよぶものは、観察点が変わるたびに変化する。…おのおのの観察点に対し瞬間的な遠近法構造があるだけである。他方、構造の不変項はあらゆる観察点に共通である。すなわち、地上の環境全体のなかのあらゆる観察点に共通する不変項もあれば、ある場所の境界内の観察点に共通する不変項もある。」(79 頁)

ギブソンは、包囲光配列が事態抽象によって形成され、環境中のあらゆる点を満たしていると考えている。その時に存在する包囲光の構造は、ある一点を取ると、そこで決定される外界とのたった一つの遠近関係が遠近法構造であり、そして、地平線のようなあらゆる観察点に共通な不変項と、ある場所のなかにある固定化された面という一定の領域内での不変項とを合わせたものが、不変構造なのだ。

遮蔽縁と包囲光の構造化

誰でも経験することだが、立木のむこうに猫が顔を出しているのを見ると、隠れている部分も知覚してしまう。この問題について、ギブソンは次のように説明している。

「情報は正面だけでなく、全体の配置に関しても、つまり、他の面をおおっている面はもちろんのこと、おおわれている面に関しても有効でなければならない。このような情報はどんなものか。おそらくそれは、包囲光配列の変化に伴い、時間的経過によって、明らかになるものである。私は、その情報が対象の面を分ける縁の中に、すなわちこれらの縁を特定する光学的特性の中に含まれていると考えたい。そして、もし他の面をおおう縁が特定されれば、おおわれている面とおおう面の両方が特定されると私は考える。」(82 頁)

ギブソンは、ここで隠されて見えない面が見える、と主張しているわけではない。「一時視界に入っていない面を知覚することが可能であるということと、視界に入っていないものは注意深く定義するのが望ましい」(83 頁）ということだ。つまり視界に入っていない隠された面の知覚はどのようにして生じるか、ということがギブソンの問題提起である。

ギブソンは、この知覚を「情報が対象の面を分ける縁に、すなわちこれらの縁を特定する光学的特性の中に」求めているが、この縁自体が事態抽象の産物だと捉えると、ギブソンの言わんとするところが理解できる。ギブソン自身が「可逆的遮蔽の原理」と名づけている観察者の左右、上下への小刻みな移動が、遠近法構造を変化させ、そして、事態抽象によって生じている縁の構造を変化させることで、隠れている面の情報が与えられるのだ。この問題について、ギブソンは細かく論じているが、あまりにも専門的になるので、ここでは紹介をひかえておこう。

包囲光配列の考察の最後で、ギブソンは包囲光はどのように構造化されるか、ということと変化のなかでの不変項という二つの問題を論じている。

「包囲光は、不変構造をどのように与えているかという問題に立ち返ってみよう。この問題は、本性の冒頭に投げかけたが、まだ答えは明確な形ではなされていない。包囲光は、観察点を取り巻く物、つまり環境によってのみ構造化されうる。つまり、大気中の空虚な媒質や霧で満たされた媒質によっては、構造化されることはない。光を吸収する面と反射する物の両方が存在しなければならない。包囲光は、さまざまな物から成る環境により、構造化されているがゆえに、環境に関する情報をもちうるのである。」(93 頁)

包囲光の構造は、面の配置、面の色素、そして面が受ける影から成るが、ここに不変構造があるとしても、それは変化項と関係した不変項である。ギブソンは、不変の光学的構造の源泉として、地上の面の配置と面の反射率をあげている。次に、変化する光学的構造の源泉として、規則的なものと循環性のものがあるとし、観察点の移動から生じる変化と、光源（主として太陽）の移動による変化をあげている。

変化のなかでの不変項について、ギブソンは、太陽の移動による影の変化を考察している。

「光学的配列にはおそらく、配置の縁や隅と面の色を特定するための根底にある不変構造が存在し、そして同時に、優勢な照明のそのときどきの方向を特定する変化する構造が存在する。光の並列のある構成要素は決して場所を交替しない――つまり、決して入れ代わらない――が、一方、他の要素は交替する。前者は固体の面を特定し、後者は実体のない影だけを特定する。面とその色は不透明なものとして記述され、影は透明なものとして記述される。」(97～8 頁)

包囲光配列は光源（太陽）の移動によって、変化するものと不変のものとがあり、影は場所を交代するが、固体の面は入れ代わらない。これも事態抽象の帰結と考えると、わかりやすい。

第３章 事象と事象を知覚するための情報

１）生態学的事象の分類

包囲光配列が、単なる光であるだけでなく、動物にとっての意味を示す刺激情報でもあることを明らかにしたギブソンは、いよいよ、この刺激情報がどのようにして知覚されるか、という問題に移っている。まずギブソンは、対象や対象を媒質から切り離す対象の面の水準で起こる事態を生態学的事象と名づけ、次のように述べている。

「生態学的事象というとき、それはいったい何をさしているのか。事実を定義し分類することはできるのだろうか。我々はそれをやってみるべきであろう。なぜならば、事象をどのようなものと考えるかがわかるときのみ、包囲光配列の変化を記述でき、そこで初めて事象の知覚に関する研究を始めることができるからである。」（102 頁）

ギブソンは、生態学的事象を分類するにあたり、太陽の運動や観察者の位置は度外視していて、なお残る事象を「面の配置の変化、面の色と肌理の変化、そして面の存在の変化」（102 頁）の三種類に分けている。

面の配置の変化は、力学で理解できるような単純な運動も含まれるが、動いている動物の表面のしなやかな変化や、水面の変化や、対象の衝突や、面の分裂などがある。

そして、面の構造の変化による色と肌理の変化について、ギブソンは、植物の面と動物の面と大地の面をあげている。色と肌理についてのギブソンの理解は特異なので、引用して紹介しておこう。

「理論的には、面の色は面の形を変えずに変わりうるし、色を変えずに面の形が変わることもありうる。これらは対象の独立した『性質』であると考えられ、また、対象の『一次的』性質と『二次的』性質の違いと考えられてきた。肌理と色は切り離せず、肌理は小さい単位の配置の水準でも、なお一種の形であるので、実際に、色と形は非常に単純化された性質である。色と形は物質の組成に特有なものであるので、ここでは色と形をまとめて考えることにする。物質が何らかの化学的反応により変えられるとき、その面も変化する。それは無彩色的にも、有彩色的にも変化する。また、結晶状のものから非結晶状のものへと微細な構造が変われば、それに応じて肌理も通常変化する。動物は物質の面と接触する前に、物質のアフォーダンスや化学的性質とか有用性を知覚する必要がある。」（105～6 頁）

これを読んだだけでは、ギブソンが何を考えているのかよくわからない。具体例を引用して補足しておこう。

「冬が近づくと木の葉の色が変わり、同時に枯れ、そして落葉する。環境内で起こる事象のいくつかの特性が相互に結びつき、情報の多次元的保証を与える。炎と燃える火、今これを抽象的な化学的事象ではなく、生態学的事象として考えると、それは複雑な動きと変形からなる。つまり、ゆらゆら揺れ動きながら輝いている面があり、次いで、不透明な面が最初は赤く、やがて黒く変わり、煙が渦巻き、ついには固体の面は消え去る。火の存在は眼はいうまでもなく、耳や鼻、皮膚に対しても特定される。」（106 頁）

たしかに木の葉が秋に紅葉するとき、木の葉の化学的組成は変化しており、それが色と肌理との変化となっている。木が燃えるときも化学的反応があるが、ギブソンが問題にするのは、あくまでも視覚との関係での事象であり、生態学的事象である。

最後に、面の存在の変化について。これは、液体が気体になったり、固体が気体になったり、その逆の変化などである。

「面というものは、物質と媒質の間の界面である。物質は複雑だが固体、粘着性のもの、弾力性のあるもの、液状、または粒状のものに分類することができる。気体はもちろん物だが材質ではない。材質が気体の状態になるときには、ただ媒質の構成要素になり、その面は存在しなくなる。それは非材質化したのではなく、非物質化したのである。もはや光を反射することもなく、それゆえに、いかなる観察点においても包囲光配列の中に特定されることはない。単に視界から消えたのではなく、存在しなくなってしまったのである。」（107 頁）

この説明はわかりやすい。

２）何を事象と考えるか

生態学的事象についての分類のあと、ギブソンは何を事象と考えるか、ということについてまとめている。基礎的現実としての事象、回帰性と非回帰性、可逆的事象と非可逆的事象、事象の入れ子構造、事象のアフォーダンス、これらの項目が順次考察されていく。最初の項目だけを検討しよう。

「まず第一に、生態学的事象の絶え間のない流れは、物理学で仮定された時間の抽象的経過とは区別される。時間の経過は等質であり、かつ直線的であると仮定されているが、事象の流れは、等質ではなく、部分部分で異なる。ニュートンは、『絶対時間、純粋時間、そして数学的時間は、それ自体で、それ自身の性質から、いかなる外界の事情とも関連せずに、均質に流れていく』と主張した。しかしこれは都合のよい神話にすぎない。事象は時間の『中』で起こり、かつ時間は『何かで満たされ』ない限り空虚であると仮定する。この常習的な考え方は本末転倒である。事象を基礎的現実として、また時間を事象からの抽象概念――時間が時を刻んでいくような、規則的に繰り返される事象から主として導かれる概念として考えてみるべきである。事象は知覚される、しかし時間は知覚されはしない。

空間も時間の場合と同じである。対象が空間を満たすのではない。なぜならば、初めから空虚な空間などありはしないからである。環境の中で変わることなく安定している面が、現実の枠組みになる。世界は決して空虚ではない。媒質に関して言えば、そこは運動や移動が起こる領域であり、光が反射し、面が照明を受けるところである。これは占められる場所とでもよばれるもので、空間ではない。面とそれが作り出す配置は知覚されるが、これまで私がずっと論じてきたように、空間が知覚されることはない。」（109 頁）

ここでのギブソンのニュートン批判は手厳しいが、それを神話として退ける手際はあまりにもプラグマティックである。というのも、ニュートンの理論は、思考方法としては合理的な抽象であり、なおかつ人工物の世界では、その理論は妥当しているからだ。さらに人工物に関しては、その理論に従った技術によって、どんどん新しいものをつくり出せている。ギブソンは、自らが発見し、定式化した生態学的事象の説明には使えない、つまり実際の役に立たない、という理由で、ニュートンの時間、空間論を「神話」ときめつけているのだが、これは一寸行き過ぎのように思われる。

ニュートンの理論が思惟抽象の世界での合理的な抽象である、ということを認めても、ギブソンの発見の価値は下がることはないし、むしろ、このことを認めた上で、事態抽象の世界にはこの合理的な抽象は妥当しない、というように展開した方が、ギブソンの理論にはふさわしいのではなかろうか。

思惟抽象と事態抽象との間の関連について考える際に、カントの超越論的仮象論から出発してみよう。このカントの説はまともに受け入れられたことはないのだが、そして、ギブソンも正しく捉えていないが、カントが言いたかったことは、合理性や因果関係は人間の理性にそなわるもので、自然にそなわっているものではない。ところが、人間は自らに属する理性の法則を、あたかも客観としてある自然の法則であるかのように捉えてしまうのだが、これは人間が理性を働かす限りは避けることの出来ない仮象なのだ、ということだった。だから、ニュートンも、人間の理性のうちにある時間と空間の概念が、あたかも客体としてある自然の法則であるかのように考えたのだ。そして、人間の理性は、そのようにしか思考できないのだ。

だから、ヴィーコのように、科学的な真理ということの吟味をすることが必要になる。ヴィーコは、科学的な真理というものは、人間が作ったもの（幾何学とか、機械とか）について妥当するが、自然については妥当しないと考えた。

ギブソンは、ここで自然について、それも生態学的事象であり、かつ、包囲光配列として抽象されたそれ、について妥当する理論を創造しようとしているのだが、そのためには、単に思惟抽象を退けるだけでは不十分だ。ギブソンによれば、時間とは繰り返される事象からの抽象であり、また初めから空虚な空間など存在しない、ということだが、これはよいとして、「時間と空間は何かで満たされなければならないような空っぽな容器ではなく、事象と面が作り出す幻影に過ぎない」（109 頁）と切ってしまうとゆきすぎだ。カントが考えたように、この幻影は、人間が理性を働かせて思惟抽象を行う限りはどうしてもとらわれてしまう仮象だから、必然的な認識上のズレなのだ。

ギブソンはそうと意識してはいないが、このズレを是そうとしている。そして、彼が考えていることは、思惟抽象としての時間、空間の概念やそしてそれが客体の法則だと思い込む思考の性を、事態抽象による時間、空間のイメージを提起することで克服することなのだ。

「時間は現代物理学が数学的便宜のために仮定しているような、空間のもう一つの次元、つまり、第 4 番目の次元ではない。時間の次元の基礎にある現実は、事象が連続的に順序立って生起することであり、空間の次元の基礎にある現実は、対象やそれぞれの面が隣りあって序列をなしているということである。」（109 頁）

事象の連続性が時間を抽出し、対象やそれぞれの面の序列が空間を抽出する、この考え方をうまく説明しようとすれば、思惟抽象とは別の抽象の様式が事態抽象としてあることを明らかにすること以外にないように思われる。

3）事象の知覚

生態学的事象についての分類と、事象とは何かについての興味深い考察のあと、事象の知覚に関する光学的情報が考察されている。それは環境内である事象が生起すると、包囲光配列はどのようになり、何が事象を特定するか、ということで、ギブソンは、それを配列の不変構造に乱れが生じることと捉えている。そして、事象の知覚についての誤った捉え方について批判を提起している。

「ここでもう一度、世界に生ずる事象は、それらの事象に対応している光の中の情報と混同されるべきでないことを想起してほしい。光の配列の中には、対象を特定する不変項のみが存在し、材料としての事象は存在せず、事象を特定する情報だけが存在する。世界に存在する対象は、そのコピー、あるいは似せて作られた像として包囲光のなかに文字どおり再現されることはない。また世界で起こることに関しても、光の中にコピーされたり再現されることなど決してあり得ない。私達は、この事実を認めるべきであるが、それでもなお、世界で起こる物体の運動は、物体を構成している要素の運動により光の中にコピーされているとか、さもなくば三次元的運動はともかく、二次元的運動はコピーされていると仮定しようとする強い誘惑にかられてきた。しかし私は、この仮定が完全に誤っていることを示そうと思う。なぜならば、この 2 種類の『運動』つまり、物理的運動と光学的運動には何にも共通性がないし、適用しうる同じ用語すらおそらくないであろう。光の中に生ずる乱れの開始と終結は、世界に起こる事象の開始と終結に対応しているが、これは対応があるというだけのことである。」（111 頁）

物体の運動が光の中にコピーされ、包囲光配列を規定する、といった考え方をギブソンは退けている。物体の運動と光の中に生ずる乱れとは対応はあるが、しかし、それはコピーや再現ではない。包囲光配列の中には事象のコピーは存在しないが、しかし、事象を特定する情報はある。

思惟抽象の世界では、分析によって抽象し、そして、到達した簡単な要素を組み立て、綜合することで、対象の合理的把握を行う。この見地からは、事象が包囲光配列に再現される、と

いうように事象を捉えざるを得ない。しかし、包囲光配列が、事象相互の関係の中での事態抽象によると捉えると、コピーという考え方をうまく退けられる。とまれ、ギブソンは事象相互の関係によって形成される光学的構造の乱れ、そしてこれが対象を特定する情報なのだが、その種類について、次の 10 種をあげている。

「1、輪郭の片側でのユニットの漸進的削除と添加（背景に対する対象の位置の変化）
2、割れ目の漸進的減少と増大
（空に対する対象の位置の変化）
3、輪郭線での光学的肌理の剪断とすべり
（円盤の回転）
4、短縮と拡張による遠近法的変換
（対象の面の転回）
5、極端な拡大と縮小（対象の接近と後退）
6、変形
（流動性、粘着性、弾力性のある事象）
7、新しい構造の出現（破裂）
8、肌理の消失（空での消散）
9、新しい肌理の古い肌理との交替
（地上での消散）
10、『色の構造』の変化
（科学的事象）」（116～7 頁）

光学的構造の乱れのこの 10 種類はあまりわかりやすいものではないし、視知覚についての理解が不十分な段階では、これらが事象を特定する情報だと言われても、簡単には肯定できない。ギブソン自身、次のように述べている。

「現象のなんとめずらしいリストか。これらを記述するのも容易ではないが、理解するのも難しい。とはいえ、これらの光学的出来事やこれに類することは、眼に対する光の配列において、始終、起こっているのである。これらの出来事をそのままに見ることはなくても、かかる光学的配列における変化が、環境で起こっている事象に関する情報を提供しているのである。」（117 頁）

このように言われて思わず考え込んでしまうが、別の言い方もある。「種々の事象を際立たせる光学的情報は、光学的配列の局部構造におけるさまざまな乱れだけである。」（120 頁）たしかに、いつも一定の場所にあったものがなくなっていると、視覚はすぐそれに気づくし、ジョギングしていて、周囲の光学的配列の変化に導かれて進行していく、といったことを想起すると、なんとなく了解できよう。

4）自己―知覚に関する光学的情報

これまでは、観察者の存在は捨象されていた。ギブソンは今度は環境のなかに位置を占めている観察者に注目している。

「通常の包囲光の中には、観察点に対して自分自身の身体の部位――まず頭、次いで胴、手足、指というふうに――がどのような距離にあるかを特定する情報が存在する。このようにして頭を中心とする自己の経験と身体に関する周辺的自己の経験は神秘的直感でも、あるいは哲学的抽象でもなく、光学的情報にもとづいているのである。」（124 頁）

たしかに、イスに座り、足を投げ出し、片目で部屋の中を見ると、視界のなかには、自分の鼻と手足が入ってくる。

「主体と客体は領域が異なるものと考えられているが、実際にはそれはただ注意の両極にすぎない。観察者と環境を分ける二元論は不必要であり、『ここ』の知覚が成立するための情報は『あそこ』の知覚に対する情報と同じ種類のものである。そして面の連続性のあと配置は、一方から他方へ広がっているのである。この事実は図 7，1 をみるとわかる。私が 1950 年に勾配とよんだものは、ここでは観察者の鼻から地平線までずっと増大してゆく距離を特定する増大する肌理の密度の勾配、増大する両眼非対応の勾配、そして減少する運動の勾配である。これらは実際には二つの極の間で変化しうるものであり、知覚における自己受容感覚と外受容感覚のこのような補足性をまさに意味している。自己の知覚と環境の知覚はともに成立するのである。」（126 頁）

主体と客体とを「注意の両極」と捉えるギブソンの考えは、意識の両極として、自我と対象を措定したヘーゲルと同じだが、ヘーゲルは意識を実体化、主体化することで、両極を意識の

契機とみなしたが、ギブソンは両極を実体とみる、外の主体の弁証法を展開している。ここで注目しておくべき点は自己受容感覚と外受容感覚とが補足性をもっている、ということだが、このことは具体的には次のようなことだ。

「人が環境内を前方に進んでいくとき、前方の世界の外側への流動と後方の世界の内側への流動とを知覚するということは、全く間違っていよう。人は、動かない世界と流動する配列を経験するのである。包囲光配列の光学的流動が外界の動きとして知覚されることはめったにないのであり、包囲光配列の光学的流動は単に身体運動感覚として経験される、つまり自己の身体の移動として、経験される。」(133 頁)

このように、ギブソンは視知覚と運動とを結び付けている。そしてそれは環境の内に自己の身体が入っていて、それが外界と連続的な包囲光配列をなしているからであり、だから、人が前に進むとき、外界が流動するのではなく、自分の身体の移動が経験されるのだ。ギブソンは要約のなかで次のように自己知覚についてまとめている。

「自己についての情報は環境についての情報に伴い、両者は分かち難い。コインの両極のように、自己の知覚と外界についての知覚は分かち難い。知覚は二つの極、主体的なるものと客体的なるものをもち、情報はその両者のいずれをも特定するのに有効である。人は環境を知覚し、同時に、自分自身を知覚する。」(136 頁)

ここでギブソンは、主体と客体とを知覚の両極と捉えている。この両極は環境の中の外界の情報と自己についての情報が分かち難く存在していることにもとづいていて、それが同時に知覚される、ということで成立する。

5) アフォーダンスの理論

アフォーダンスは、ギブソンの理論のなかで一番注目されているものだ。ここでギブソンのアフォーダンスの理論について、ギブソンが述べているところをまとめてみよう。まずアフォーダンスという用語について、ギブソンは次のように述べている。

「環境のアフォーダンスとは、環境が動物に提供するもの、良いものであれ、悪いものであれ、用意したり備えたりするものである。アフォードするという動詞は、辞書に在るが、アフォーダンスという名詞はない。この言葉は私の造語である。アフォーダンスという言葉で私は、既存の用語では表現し得ない仕方で、環境と動物の両者に関連するものを言い表したいのである。この言葉は動物と環境の相補性を包含している。」(137 頁)

次に、アフォーダンスは主観ー客観の二分法を超えているものとして主張されている。

「環境のアフォーダンスをめぐる重要な事実は、価値や意味がしばしば、主観的で、現象的、精神的であると考えられているのとは異なり、アフォーダンスがある意味で、客観的、現実的、物理的であるということである。けれども実際には、アフォーダンスは客観的特性でも主観的特性でもない。あるいはそう考えたければ、その両方であるかも知れない。アフォーダンスは、主観的ー客観的の二分法の範囲を超えており、二分法の不適切さを我々に理解させる助けとなる。それは環境の事実であり、同様に行動の事実でもある。それは物理的でも心理的でもあり、あるいはそのどちらでもないのである。アフォーダンスは、環境に対する、そして観察者に対する両方の道を指示している。」(139 頁)

ここでギブソンは、環境が、動物という視覚をもった存在と関係すると、それが「物理的でも心理的でもあり、あるいはそのどちらでもない」ものへと転化されていることに注目している。つまり自然物が動物の視覚との関係では、包囲光配列というアフォーダンスを示す情報の担い手として形態規定されていることを発見したのだ。だから、ギブソンは、価値と意味に関する既存の理論に組することは出来ない。

「アフォーダンスの理論は、価値と意味に関する既存の理論と著しくかけ離れている。アフォーダンスの理論は、価値とは何か、意味とは何かの新しい定義から始まる。アフォーダンスを知覚することは、これまで共通に同意されることのなかった仕方で意味が何がしか付け加えられる、価値からは自由な物理的対象を知覚する過程ではない。アフォーダンスを知覚することは、価値に満ちている生態学的対象を知覚する過程である。いかなる物質、いかなる面、いかなる配置も、だれかに対して有益な、あるいは有害なアフォーダンスをもっている。物理学は価値から自由であるが、生態学はそうではない。」(153 頁)

動物との関係で対象が二重物として現れる、ということは、物理的存在そのものが、関係によって形態規定されて、価値と意味をもつものとして意義をもつようになる、ということだ。ギブソンは、この生態学的対象と動物との視覚関係を光関係に抽象し、そして、この光関係における実体を包囲光配列と捉えることで、生態学的対象の二重性を明らかにした。

「アフォーダンスを作る環境の基本的特性は、包囲光配列の構造の中に特定されており、それゆえにアフォーダンス自身が包囲光の中に特定されているのである。そのうえ観察者自身の身体に相応した不変項変数は、観察者の身体に相応しない不変項変数より、ずっと容易に抽出されるのである。」(156 頁)

さて、動物の視覚を環境との光関係に還元し、放射光という自然物が動物との視覚関係では形態規定されて包囲光配列となり、これが視覚情報となって動物にアフォーダンスの情報を与える、というギブソンの理論の大枠は了解できた。問題は、包囲光配列の不変項の抽出ということがどのようになされるかを示すことにある。ギブソンは第 3 部でこの問題に取り組んでいる。

後　記

ブッシュの戦争で、フセイン政権が打倒されたと報道されています。政権打倒を目的に戦争を仕掛けることは、国家として許し難い行為ですが、軍隊を用いたテロで政権を打倒しても、戦後処理の政治的安定は困難でしょう。

PC 講座のテーマを「現状分析」にしたこともあり、今年に入ってアメリカの金融システムの現状を調べているときにブッシュが戦争を仕掛けました。それで、単に現状を知るだけでなく、世界唯一の超大国となったアメリカが何故戦争をせざるを得ないのか、という問題の解明を迫られることになりました。

ここ数年、哲学づいていて、信用論研究については中断したままでしたので、頭の切り替えに随分時間をとられましたが、ここに来て、論文執筆のイメージが出来ました。当初は本号に掲載することを考えていましたが、戦争の結果をもうすこし見定めたいこともあり、次号にまわします。

今の作業は、宮崎義一の『複合不況』(中公新書) の検証から入り、箭内昇の『メガバンクの誤算』(中公新書) で、90 年代アメリカの銀行の復活過程を整理するとともに、吉川元忠の『マネー敗戦』(文春新書) の論旨のまとめに入っています。あと、森佳子の『米国通貨戦略の破綻』(東洋経済新報社) も面白かったので、これも取り上げる予定です。この一連の作業のあと、外国為替市場や、その他の金融システムの概略と、そこでの架空資本の運動について、理論的にまとめようと考えています。

さて、本号の内容についてですが、最近、NPO法人ニュースタート関西事務局のHPの掲示板によく書き込んでいますので、それをまとめてみました。対話の相手方の書き込みが出ていないので、読みづらいかも知れませんが、これも「新しい思考」を若い人たちに理解してもらうための試みです。

次にリエターの『マネー崩壊』へのコメントを書いてみました。リエターの無意識論を批判しておきましたが、リエター自身は、次作の『マネー』でユングの元型論を採用しています。リエターは、無意識を人間の内面に求めてしまったのですね。これには、私は納得できません。

あとギブソン『生態学的視覚論』のつづきですが、もとの予定ではさらに若干書き加えるつもりでした。でも一寸余力がありませんので、中途ですが、これで終わることにします。

ワーカーズ・コレクティブサポートセンター（生産者協同組合を改称）では、事務局でNPO法人を取得することに決め、いま申請書類の準備をしているところです。秋頃には認可されるでしょう。サポートセンター事務局の事業としては、社会教育で、すでに農業学校が始まっていますが、その他の企画はまだ進んでいません。自身のPC講座の経験からも、受講生をきちんと集められるかどうかが問題で、この問題がクリアーされれば、いつからでも発足できるでしょう。秋頃までには目途をつけたいと考えています。

それから、自費出版のお手伝いをする体制が出来ました。自費出版を希望している人を紹介して下さい。よろしくお願いします。